081
Y978
T
00974891

古今和歌集

後撰和歌集

全全

081
Y978
T III
(9)

数量更正

974891

緒言

古今和歌集は勅撰歌集の權輿にして、醍醐天皇の延喜五年四月、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等が勅を奉じ撰出せるもの也。其收むる所二十卷一千一百首、技巧に流れず、粗朴に偏せずして、文質共に備り、古來斯道の典範として文人歌客の間に推賞せらる。香川景樹が此集を評して「自然の花」といへりしは、最も肯綮に中れる言ならん。

後撰和歌集は古今集の撰進に後るる事四十六年、村上天皇の天暦五年に、源順、大中臣能宣、清原元輔、紀時文、阪上望城の五人を梨壺に集め撰出せしめられしところといふ。鴨長明の無明抄に「後撰集はよろしき歌古今に取り盡されて後いくほども經ざれば歌得難くて姿を選ばずして心を先とせり」といへるが如く、古今集に比しては、情詞共に稍劣れるの觀無き能はずと雖も、之を新古今集以後

の諸集に比する時は、高雅清新の趣を有するに於て、其優劣元より同日の談にらず。

今本書を覆刻するに當りては、正保四年開版の八代集原本を底本とし、天和二年版の八代集抄を參考せる外、古今集には打聽、遠鏡、正義、後撰集には新抄本の類を參照して嚴密に校訂し、異說の如きも、すべて原本の形式に準じ、之を傍注する事となしたり。

明治四十四年五月

校訂者　塚本哲三

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者。託其根於心地。發其花於詞林者也。人之在世。不能無爲。思慮易遷。哀樂相變。感生於志。詠形於言。是以逸者其聲樂。怨者其吟悲。可以述懷。可以發憤。動天地。感鬼神。化人倫。和夫婦。莫宜於倭歌。倭歌有六義。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。若夫春鶯之囀花中。秋蟬之吟樹上。雖無曲折。各發歌謠。物皆有之。自然之理也。然而神世七代。時質人淳。情欲無分。倭歌未作。逮于素盞嗚尊到出雲國。始有三十一字之詠。今反歌之作也。其後雖天神之孫。海童之女。莫不以倭歌通情者也。爰及人代。此風大興。長歌短歌旋頭混本之類。雜體非一。源流漸繁。譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙。浮天之波起於一滴之露。至如難波津之什。獻天皇。富緒川之篇。報太子。或事關神異。或興入幽玄。但見上古歌。多存古質之語。未爲耳目之翫。徒爲教誡之端。古

天子每良辰美景。詔侍臣預宴筵者。獻倭歌。君臣之情由斯可見。賢愚之性於是相分所以隨民之欲。擇士之才也。自大津皇子之初作詩賦。詞人才子慕風繼塵。移彼漢家之字化我日域之俗。民業一改倭歌漸衰。然猶有先師柿本大夫者。高振神妙之思。獨步古今之間。有山邊赤人者。竝倭歌仙也。其餘業倭歌者綿々不絕。及彼時變澆漓人貴奢淫。浮詞雲興。艶流泉涌。其實皆落其花孤榮。至有好色之家以此爲花鳥之使。乞食之客以此爲活計之媒。故半爲婦人之右。難進丈夫之前。近代存古風者纔二三人而已。然長短不同論以可辨。花山僧正尤得歌體。然其詞花而少實。如圖畫好女徒動人情。在原中將之歌。其情有餘其詞不足。如萎花雖少彩色而有薰香。文琳巧詠物然其體近俗。如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰。其詞華麗而首尾停滯。如望秋月遇曉雲。小野小町之歌。古衣通姬之流也。然艶而無氣力。如病婦之著花粉。大友黑主之歌。古猿丸大夫之姿也。頗有逸興而體甚鄙。如田夫之息花前也。此外氏姓流聞者不可勝計。其大底皆以艶爲基。不知歌之趣者也。俗人爭事榮利不用詠倭歌。悲哉悲哉。雖貴

兼相將富餘金錢。而骨未腐於土中。名先滅於世上。適爲後世被知者唯倭歌之人而已。何者語近人耳。我慣神明也。昔

平城天子詔侍臣令撰萬葉集。自爾以來時歷十代。數過百年。其後倭歌棄不被採用。雖風流如野宰相。雅情如在納言。而皆以他才聞。不以斯道顯。伏惟

陛下御宇于今九載。仁流秋津洲之外。惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲。寂々閉口。砂長爲巖之頌。洋々滿耳。思繼既絕之風。欲興久廢之道。爰詔大內記紀友則御書所預紀貫之前甲斐少目凡河內躬恒右衞門府生壬生忠岑等。各獻家集并古來舊歌。曰續萬葉集。於是重有詔。部類所奉之歌。勒爲二十卷。名曰古今倭歌集。臣等詞少春花之艶。名竊秋夜之長。況乎進恐時俗之嘲。退慙才藝之拙。適遇倭歌之中興。以樂吾道之再昌。嗟呼人麿既歿。倭歌不在斯哉。于時延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之等謹序。

古今和歌集序

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人事わざしげき物なれば、心に思ふ事を見る物きく物につけていひ出せるなり。花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌也。この歌天地の開けはじまりける時より出できにけり。しかあれども世に傳はる事は、久方のあめにしては、下照姫に始り、あらがねのつちにしては、すさのをの尊よりぞおこりける。ちはやぶる神代には、歌の文字も定らず、すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。人の世となりて、すさのをの尊よりぞ、三十もじあまり一もじはよみける。かくてぞ、花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心詞おほ

くさまざまになりにける。遠き所も出でたつ足もとより始りて年月をわたり、高き山も麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまでおひのぼれるが如くに、この歌もかくの如くなるべし。難波津の歌は帝のおほん始なり。淺香山の言葉は采女のたはぶれよりよみて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始にもしける。そもそも歌のさま六つなり。からの歌にもかくぞ有るべき。その六くさの一つにはそへ歌。おほささぎのみかどをそへたてまつれるうた、なにはづにさくやこの花冬ごもり今はるべと咲くやこの花といへるなるべし。二つにはかぞへ歌。咲く花に思ひつく身のあぢきなさ身にいたつきのいるも知らずてといへるなるべし。三つにはなずらへ歌。君にけさあしたの霜のおきていなば戀しきごとに消えやわたらむといへるなるべし。四つにはたとへ歌。わがこひはよむともつきじありそ海の濱の眞砂はよみつくすともといへるなるべし。五つにはただごと歌。僞のなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからましといへるなるべし。六つにはいはひ歌。この殿はむべもとみけりさき草のみつばよつばにとのづくりせりといへるなるべし。今の世の中、色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出でくれば、色ごのみの家に、埋木の人しれぬ事となりて、まめなる所には、花薄（すすき）ほにいだすべき事にもあらず成りにたり。その始を思へば、かかるべくなむあらぬ。いにしへの代々の帝、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々をめして、ことにつけつつ歌を奉らしめ給ふ。あるは花をこふとて、たよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見たまひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず、さされ石にたとへ、筑波山にかけて君を願ひ、よろこび身にすぎ、たのしみ心にあまり、富士の煙によそへて人をこひ、松蟲のねに友をしのび、高砂住の江の松もあひおひのやうに覺え、男山の昔を思ひ出でて、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。又春

のあしたに花のちるを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き、草の露、水の沫を見て、我が身をおどろき、あるは昨日は榮えおごりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは松山の波をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、曉の鳴のはねがきをかぞへあるは吳竹のうきふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨みきつるに、今はふじの山も煙たたずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心をなぐさめける。いにしへよりかく傳はるうちにも、奈良のおほん時よりぞひろまりにける。かの御世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時におほきみつのくらゐ柿本の人麿なむ歌のひじりなりける。これは君も人も身を合せたりといふなるべし。秋のゆふべ龍田川に流るる紅葉をば、みかどのおほん目には錦と見給ひ、春のあした吉野山の櫻は、人麿が心には雲かとのみなむ覺えける。又山邊赤人といふ人あり、歌にあやしくたへなりけり。人麿は赤人がかみに

たたむ事かたく、赤人は人麿がしもにたたむ事かたくなむありける。この人々をおきて、又すぐれたる人も、吳竹のよよに聞え、片糸のよりよりに絶えずぞ有りける。これよりさきの歌をあつめてなむ、萬葉集となづけられたりける。ここにいにしへの事をも、歌の心をも知れる人、わづかにひとりふたりなりき。しかあれど、これかれ得たる所えぬ所、たがひになむある。かの御時よりこのかた、年は百年あまり、世はとつぎになむなりにける。いにしへの事をも歌をも知れる人よむ人多からず。今この事をいふに、つかさ位高き人をば、たやすきやうなればいれず。その外に近き世にその名聞えたる人は、すなはち僧正遍昭は、歌のさまはえたれども、誠すくなし。たとへば繪にかける女を見て、徒に心を動かすが如し。在原業平は、その心餘りて詞たらず、しぼめる花の色なくて、にほひ殘れるが如し。文屋康秀は、詞たくみにてそのさま身におはず、いはば商人のよききぬ著たらむが如し。宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして始終たしかならず、いはば

秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し。よめる歌おほくきこえねばこれかれかよはしてよく知らず。小野小町はいにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにてつよからず、いはばよき女のなやめる所あるに似たり。つよからぬはをうなの歌なればなるべし。大友黒主はそのさまいやし、いはば薪を負へる山人の、花の陰にやすめるが如し。このほかの人々、その名きこゆる、野邊におふるかつらのはひひろごり、林にしげき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひてそのさま知らぬなるべし。かかるに今すべらぎの天の下しろしめすこと、四の時九のかへりになむなりぬる。あまねきおほんうつくしみの波、八島のほかまで流れ、廣きおほん惠の陰、筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづのまつりごとをきこしめすいとま、もろもろの事を捨て給はぬあまりに、いにしへの事をも忘れじ、ふりにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にもつたはれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書の所のあづかり紀貫之

さきの甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それがなかにも、梅をかざすよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また鶴龜につけて君をおもひ、人をもいはひ、秋萩夏草を見て妻をこひ、逢坂山にいたりてたむけを祈り、あるは春夏秋冬にもいらぬくさぐさの歌をなむ、えらばせたまひける。すべて千歌二十卷、名づけて古今和歌集といふ。かくこのたびあつめえらばれて、山下水のたえず、濱のまさごの數おほくつもりぬれば、今は飛鳥川の瀨になるうらみも聞えず、さされ石の巖となるよろこびのみぞあるべきそれまくら言葉は春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ秋の夜の長きをかこてれば、かつは人のみみにおそり、かつは歌の心にはぢ思へど、たなびく雲のたちゐなく鹿のおきふしは、貫之らがこの世におなじくうまれて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。人麿なくなりにたれど、歌のこととどまれ

るかな。たとひ時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸たえず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長くつたはり、鳥の跡ひさしくとどまれらば、歌のさまをも知り、ことの心をも得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、いにしへをあふぎて、今を戀ひざらめかも。

古今和歌集目錄

卷一　春歌上……一
卷二　春歌下……一三
卷三　夏　歌……二五
卷四　秋歌上……三一
卷五　秋歌下……四四
卷六　冬　歌……五七
卷七　賀　歌……六二
卷八　離別歌……六七
卷九　羇旅歌……七六
卷十　物　名……八二
卷十一　戀歌一……九一
卷十二　戀歌二……一〇〇
卷十三　戀歌三……一一〇
卷十四　戀歌四……一二一
卷十五　戀歌五……一三三
卷十六　哀傷歌……一四六
卷十七　雜歌上……一五五
卷十八　雜歌下……一六九
卷十九　長　歌……一八三
旋頭歌……一八九
誹諧歌……一九〇
卷二十　大歌所御歌……一九九
神あそびの歌……二〇〇
東　歌……二〇二

後撰和歌集目錄

卷一　春歌上……二〇九
卷二　春歌中……二一九
卷三　春歌下……二二六
卷四　夏　歌……二四〇
卷五　秋歌上……二五三
卷六　秋歌中……二六二
卷七　秋歌下……二七六
卷八　冬　歌……二九一
卷九　戀歌一……三〇〇
卷十　戀歌二……三一七
卷十一　戀歌三……三三八
卷十二　戀歌四……三六〇
卷十三　戀歌五……三八一
卷十四　戀歌六……四〇三
卷十五　雜歌一……四二〇
卷十六　雜歌二……四三四
卷十七　雜歌三……四五一
卷十八　雜歌四……四六五
卷十九　離別歌……四七七
　　羇旅歌……四八六
卷二十　慶賀歌……四九二
　　哀傷歌……四九六

古今和歌集　卷第一

春歌上

在原元方

ふる年に春立ちける日よめる

年の内に春はきにけり一年を去年（こぞ）とやいはむ今年とやいはむ

紀貫之

春立ちける日よめる

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

讀人しらず

題しらず

春がすみ立てるやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ

二條后の春のはじめの御歌

雪のうちに春はきにけりうぐひすの氷れる涙いまやとくらむ

081.6
Y

題しらず　讀人しらず

梅が枝にきゐる鶯はるかけて鳴けどもいまだゆきはふりつつ

雪の木に降りかかれるをよめる　素性法師

春たてば花とや見らむしら雪のかかれる枝にうぐひすのなく

題しらず　讀人しらず

心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

或人の曰くさきのおほきおほいまうち君の歌なり

二條后の東宮の御息所ときこえける時正月三日

御前に召して仰言ある間に日は照りながら雪の

頭に降りかかりけるをよませ給ひける　文屋康秀

春の日の光にあたるわれなれどかしらの雪となるぞわびしき

雪の降りけるをよめる　紀貫之

かすみたち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける　藤原言直

春のはじめによめる

春やとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな　壬生忠岑

春のはじめの歌

春きぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞおもふ　源當純

寛平の御時后の宮の歌合の歌

谷風にとくる氷のひまごとにうち出づるなみや春のはつはな　紀友則

はなの香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる　大江千里

鶯のたによりいづるこゑなくば春くることをたれか知らまし　在原棟梁

春たてど花もにほはぬ山里はものうかる音にうぐひすぞなく

題しらず　讀人しらず

野邊ちかく家居をしれば鶯のなくなる聲はあさなあさな聞く

春日野は今日はな燒きそ若草の妻もこもれりわれもこもれり

かすがの野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜つみてむ

みやまには松の雪だにきえなくに都は野邊のわかな摘みけり

梓弓おしてはるさめ今日降りぬ明日さへふらば若菜つみてむ

仁和のみかど皇子におましける時に人に若菜たまひける御歌　貫之

君がため春の野にいでてわかな摘むわが衣手に雪はふりつつ

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる　貫之

春日野の若菜つみにやしろたへの袖ふりはへて人のゆくらむ

題しらず　在原行平朝臣

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

寛平の御時后の宮の歌合の歌に詠める　源宗于朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

歌奉れと仰せられし時詠みてたてまつれる　貫之

我がせこが衣はる雨ふるごとに野邊のみどりぞ色まさりける

あをやぎの糸よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか

題しらず　讀人しらず

百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれどもわれぞふりゆく

をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

雁の聲を聞きて越へまかりける人を思ひてよめる　凡河内躬恒

春くれば雁かへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし

歸る雁をよめる　伊勢

春がすみたつを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる

題しらず　讀人しらず

折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここにうぐひすの鳴く

いろよりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

梅の花を折りてよめる　東三條の左のおほいまうち君

うぐひすの笠にぬふてふ梅の花をりてかざさむ老かくるやと

題しらず　素性法師

外にのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

梅の花を折りて人におくりける　友則

君ならでたれにか見せむ梅のはな色をも香をも知る人ぞしる

くらぶ山にてよめる　貫之

梅の花にほふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける

月夜に梅の花を折りてと人のいひければをるとてよめる　躬恒

月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜の闇はあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくるる

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しくやどらでほどへて後にいたれりければ彼の家のあ

るじかくさだかになむやどりはあるといひ出し
て侍りければそこにたてりける梅の花を折りて
よめる　　貫之

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

水のほとりに梅の花の咲けりけるを詠める　　伊勢

春ごとにながるる川を花と見て折られぬ水にそでやぬれなむ

年をへて花の鏡となる水はちりかかるをやくもるといふらむ

家に有りける梅の花のちりけるをよめる　　貫之

暮るると明くとめかれぬ物を梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　讀人しらず

梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐとも形見ならまし

素性法師

散ると見てあるべき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる
題しらず　　讀人しらず

ちりぬとも香をだに殘せ梅のはな戀しきときの思ひ出にせむ

人の家にうゑたりける櫻の花咲きはじめたりけるを見てよめる　　貫之

ことしより春知りそむる櫻花ちるといふことは習はざらなむ
題しらず　　讀人しらず

山高み人もすさめぬさくら花いたくなわびそわれ見はやさむ

又は里とほみ人もすさめぬ山櫻

山櫻わが見にくればはるがすみ嶺にもをにもたちかくしつつ

染殿の后の御前に花瓶に櫻の花をささせ給へるを見て
よめる　　前のおほきおほいまうち君

年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし
　　渚の院にて櫻を見てよめる　　在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこころはのどけからまし
　　題しらず　　讀人しらず

いはばしる瀧なくもがな櫻花たをりてもこむ見ぬひとのため
　　山の櫻を見てよめる　　素性法師

見てのみや人にかたらむ櫻花手ごとに折りていへづとにせむ
　　花ざかりに京を見やりてよめる

見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞはるのにしきなりける
　　櫻の花の下にて年の老いぬる事を歎きてよめる　紀友則

色も香もおなじ昔に咲くらめどとしふる人ぞあらたまりける
　　をれる櫻をよめる　　貫之

たれしかもとめてをりつる春がすみ立ちかくすらむ山の櫻を
　　歌奉れと仰せられし時によみてたてまつれる

櫻花咲きにけらしもあしびきの山のかひより見ゆるしらくも
　　寛平の御時后の宮の歌合の歌　　友則

みよし野の山邊にさける櫻ばな雪かとのみぞあやまたれける
　　やよひに閏月の有りける年よみける　　伊勢

さくらばな春くはれる年だにもひとの心にあかれやはせぬ
　　櫻の花のさかりに久しくとはざりける人のきたりける時によみける　　讀人しらず

あだなりと名にこそたてれ櫻花としにまれなる人も待ちけり
　　かへし　　業平朝臣

今日こずば明日は雪とぞ降りなまし消えずは有りとも花と見ましや

題しらず　讀人しらず

ちりぬれば戀ふれど驗なきものをけふこそ櫻をらば折りてめ
折りとらばをしげにもあるか櫻花いざ宿かりて散る迄は見む　紀在友

さくら色に衣はふかくそめてきむ花のちりなむ後のかたみに
櫻の花のさけりけるを見にまうできたりける人　躬恒
によみておくりける

我が宿の花見がてらにくる人はちりなむのちぞ戀しかるべき
亭子院歌合の時よめる　伊勢
見る人もなき山里のさくら花ほかのちりなむのちぞ咲かまし

古今和歌集　卷第二

春歌下

題しらず　讀人しらず

春がすみたなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく
待てといふに散らでしとまる物ならば何を櫻に思ひまさまし
のこりなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はての憂ければ
このさとに旅寐しぬべし櫻ばなちりのまがひに家路わすれて
うつ蟬の世にも似たるか花櫻さくと見しまにかつ散りにけり
僧正遍昭によみておくりける　惟喬のみこ
櫻花ちらばちらなむ散らずとてふるさと人のきても見なくに

雲林院にて櫻の花のちりけるを見てよめる　そうく法師

櫻散るはなのところは春ながら雪ぞふりつつきえがてにする

櫻の花の散り侍りけるを見て詠みける　素性法師

花ちらす風のやどりはたれかしるわれに教へよ行きて恨みむ

雲林院にて櫻の花をよめる　そうく法師

いざ櫻我もちりなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ

あひ知れりける人のまうできて歸りにける後に

よみて花にさしてつかはしける　貫之

ひとめ見し君もやくるると櫻花けふは待ちみて散らばちらなむ

山の櫻を見てよめる

春がすみなにかくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを

心地そこなひてわづらひける時に風にあたらじ

とておろしこめてのみ侍りける間に折れる櫻の

散りがたになれりけるを見てよめる　藤原よるかの朝臣

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり

春宮の雅院にて櫻の花のみかは水にちりてながれけるを見てよめる　菅野高世

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ（見れィ）

櫻の花のちりけるをよめる　貫之

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花みるわれさへにしづ心なし

櫻のごと疾くちる物はなしと人のいひければよめる

さくら花とく散りぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ

さくらの花のちるをよめる　紀友則

久かたのひかりのどけきはるの日にしづ心なく花のちるらむ　藤原好風

春宮の帶刀の陣にて櫻の花の散るをよめる

春風ははなのあたりをよきて吹け心づからやうつろふとみむ　凡河内躬恒

櫻のちるをよめる

ゆきとのみ降るだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹くらむ　貫之

ひえに登りて歸りまうできて詠める

山たかみ見つつわがこし櫻花かぜはこころにまかすべらなり　大件黑主　一本

題しらず

はるさめの降るは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなければ　貫之

亭子院の歌合の歌

さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに波ぞ立ちける　貫之

ならのみかどの御歌

故郷となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花は咲きけり　良岑宗貞

春の歌とてよめる

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風　素性法師

寛平の御時后の宮の歌合の歌

花の木も今はほり植ゑじ春たてばうつろふ色に人ならひけり　讀人しらず

題しらず

春の色の到り到らぬ里はあらじ咲けるさかざる花の見ゆらむ　貫之

春の歌とてよめる

三輪山をしかもかくすか春がすみ人にしられぬ花やさくらむ　素性

雲林院の皇子のもとに花見に北山のほとりにまかれりける時によめる

いざけふは春の山邊にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは

春の歌とてよめる

いつ迄か野邊に心のあくがれむ花し散らずば千代も經ぬべし　讀人しらず

題しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

花のごと世の常ならばすぐしてし昔はまたもかへり來なまし

吹く風にあつらへつくる物ならば此一本はよきよといはまし

待つひとも來ぬものゆゑに鶯のなきつる花を折りてけるかな

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風

咲く花はちぐさながらにあだなれど誰かは春を恨みはてたる

春がすみ色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも　在原元方

かすみたつ春の山邊はとぼけれど吹きくる風は花の香ぞする

うつろへる花を見てよめる　躬恒

花みれば心さへにぞうつりけるいろには出でじ人もこそ知れ

題しらず　讀人しらず

鶯のなく野邊ごとに來てみればうつろふ花にかぜぞ吹きける

吹くかぜをなきてうらみよ鶯はわれやは花に手だにふれたる　典侍洽子朝臣

散る花のなくにしとまるものならばわれ鶯におとらましやは

仁和の中將の御息所の家に歌合せむとてしける

時によめる　藤原後蔭

花のちることやわびしき春がすみたつたの山のうぐひすの聲

鶯の鳴くをよめる　素性

木傳へばおのが羽風にちる花を誰におほせてここら鳴くらむ

鶯の花の木にて鳴くをよめる　躬恒

しるしなき音をもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらず　讀人しらず

駒なめていざ見にゆかむ故郷は雪とのみこそはなは散るらめ

散る花を何か恨みむ世の中にわが身もともにあらむものかは　小野小町

花の色は移りにけりな徒に我が身世にふるながめせしまに

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとてしける時によめる　素性

をしと思ふ心は糸によられなむ散る花ごとにぬきてとどめむ

志賀の山越にをんなの多くあへりけるによみて遣しける　貫之

梓弓はるのやまべを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春の山邊にねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

吹く風と谷の水としなかりせばみやまがくれの花を見ましや

志賀より歸りける女どもの花山に入りて藤の花の下に立ちよりて歸りけるに詠みて送りける　僧正遍昭

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

家に藤の花さけりけるを人の立ちとまりて見けるをよめる　躬恒

我が宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ　讀人しらず

題しらず

今もかも咲きにほふらむたちばなのこじまのさきの山吹の花　貫之

はるさめに匂へるいろもあかなくに香さへなつかし山吹の花

山吹はあやなな咲きそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに（人のィ）

吉野川の邊に山吹の咲けりけるをよめる　貫之

吉野川きしのやまぶき吹く風に底のかげさへうつろひにけり

題しらず　讀人しらず

かはづなく井手の山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

此歌は或人のいはく橘のきよともが歌なり

春の歌とてよめる　素性

思ふどち春の山邊にうちむれてそこともいはぬ旅寐してしが

春のとく過ぐるをよめる　躬恒

梓弓春たちしよりとしつきの射るがごとくもおもほゆるかな

やよひに鶯の聲久しう聞えざりけるをよめる　貫之

鳴きとむる花しなければ鶯もはてはものうくなりぬべらなり

やよひのつごもりがたに山を越えけるに山川よ

り花の流れけるをよめる　深養父

花ちれる水のまにまにとめくれば山にも（ぞィ）春はなくなりにけり

春を惜みてよめる　元方

をしめどもとどまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　興風

聲たえずなけや鶯ひととせにふたたびとだに來べきはるかは

やよひのつごもりの日花つみより歸りける女ど

もを見てよめる　躬恒

とどむべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

やよひのつごもりの日雨の降りけるに藤の花を折りて人に遣しける　業平朝臣

ぬれつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

亭子院の歌合に春のはての歌　躬恒

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

古今和歌集　卷第三

夏　歌

題しらず　讀人しらず

我がやどの池の藤波さきにけり山ほととぎすいつか來なかむ

この歌ある人のいはく柿本人麿がなり

卯月にさける櫻を見てよめる　紀としさだ

あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれて獨さくらむ

題しらず　讀人しらず

さつきまつ山郭公うち羽ぶきいまもなかなむ去年のふるこゑ

伊勢

五月こばなきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや　讀人しらず

さつき待つ花たちばなの香をかげば昔のひとの袖の香ぞする

いつのまに五月きぬらむあしびきのやま郭公いまぞ鳴くなる

けさきなき未だ旅なるほととぎす花たちばなに宿はからなむ　紀友則

音羽山を越えける時に郭公の鳴くをききてよめる

音羽山けさ越えくればほととぎす梢はるかにいまぞなくなる　素性

郭公の初めて鳴きけるを聞きてよめる

ほととぎす初聲きけばあぢきなく主さだまらぬ戀せらるはた

奈良の石の上寺にて郭公の鳴くをよめる

いそのかみふるきみやこの郭公聲ばかりこそむかしなりけれ　讀人しらず

題しらず

夏山になくほととぎす心あらば物おもふわれに聲な聞かせそ

ほととぎすなく聲きけばわかれにし故郷さへぞ戀しかりける

郭公ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

思ひいづるときはの山の郭公からくれなるのふり出てぞ鳴く

こゑはして涙は見えぬほととぎすわが衣手のひづをからなむ

あしびきの山郭公をりはへてたれかまさると音をのみぞなく

いまさらに山へかへるな郭公こゑのかぎりは我がやどに鳴け　みくにのまち

やよやまて山郭公ことづてむわれ世のなかにすみわびぬとよ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　紀友則

さみだれに物思ひをれば郭公夜ぶかく鳴きていづち行くらむ

夜やくらき道やまどへる郭公わがやどをしも過ぎがてに鳴く

やどりせし花たちばなも枯れなくになど郭公こゑたえぬらむ　大江千里

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑに明くるしののめ　紀貫之

暮るるかとみれば明けぬる夏の夜をあかずとや鳴くやま郭公　壬生忠岑

夏山にこひしき人や入りにけむ聲ふりたてて鳴くほととぎす　紀秋岑

題しらず

去年の夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ　讀人しらず

郭公の鳴くを聞きてよめる

五月雨のそらもとどろに郭公なにをうしとか夜ただ鳴くらむ　貫之

さぶらひにてをのこどもの酒たうべけるに召し

て郭公まつ歌よめとありければよめる　躬恒

郭公こゑもきこえず山びこはほかに鳴く音をこたへやはせぬ

山に郭公の鳴きけるを聞きてよめる　貫之

郭公ひとまつやまに鳴くなればわれうちつけに戀まさりけり

早くすみける所にて郭公の鳴きけるを聞きてよめる　忠岑

むかしべや今も戀しきほととぎす故郷にしもなきてきつらむ

郭公の鳴きけるを聞きてよめる　躬恒

ほととぎすわれとはなしにうの花の憂世の中に鳴き渡るらむ

蓮の露を見てよめる　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

月の面白かりける夜あかつきがたによめる　深養父

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月宿るらむ

隣より常夏の花をこひにおこせたりければをし

みてこの歌をよみて遣しける　躬恒

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしよりいもと我がぬる常夏の花

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひぢはかたへ涼しき風や吹くらむ

古今和歌集　卷第四

秋歌上

秋立つ日よめる　藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

秋立つ日うへのをのこども賀茂の川原に川逍遙

しけるともにまかりてよめる　貫之

川風の涼しくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ

題しらず　讀人しらず

我がせこがころもの裾を吹きかへしうら珍らしき秋のはつ風

昨日こそさなへとりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風ぞ吹く

秋風の吹きにし日より久かたのあまの河原にたたぬ日はなし
ひさかたの天の河原のわたしもり君渡りなばかぢかくしてよ
天の川もみぢを橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ
こひ戀ひて逢ふ夜は今宵天の川霧たち渡りあけずもあらなむ

寛平の御時七日の夜うへにさぶらふ男ども歌奉れと仰せられける時人にかはりてよめる　友則

天の川あさせしら波たどりつつ渡りはてねば明けぞしにける

同じ御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風

契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは

なぬかの日の夜よめる　凡河内躬恒

年ごとに逢ふとはすれど七夕のぬる夜の數ぞすくなかりける
たなばたにかしつる糸のうちはへて年のを長く戀ひや渡らむ

題しらず　素性

今宵來む人にはあはじたなばたの久しき程に待ちもこそすれ

七日の夜の曉によめる　源宗于朝臣

今はとてわかるるときは天の川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

八日の日よめる　壬生忠岑

けふよりは今こむ年の昨日をぞいつしかとのみ待ち渡るべき

題しらず　讀人しらず

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり
大かたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ
わが爲にくる秋にしもあらなくに蟲の音きけばまづぞ悲しき
物ごとに秋ぞ悲しきもみぢつつ移ろひゆくをかぎりと思へば
ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけり

これさだのみこの家の歌合の歌

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける

かんなりのつぼに人々集りて秋の夜をしむ歌よ

みけるついでによめる　躬恒

かく許(はかり)をしと思ふ夜をいたづらに寐て明すらむ人さへぞうき

題しらず　讀人しらず

しら雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへみゆる秋の夜の月

さよなかと夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月渡るみゆ

是貞のみこの家の歌合によめる　大江千里

月見ればちぢに物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

久かたのつきの桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ　忠岑

月をよめる

秋の夜のつきの光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり　在原元方

人のもとにまかれりける夜きりぎりすの鳴きけるを聞きてよめる　藤原ただふさ

蟋蟀(きりぎりす)いたくな鳴きそあきの夜のながきおもひはわれぞまされる

是貞のみこの家の歌合のうた　敏行朝臣

秋の夜の明くるもしらず鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ

題しらず　讀人しらず

秋萩も色づきぬればきりぎりすわがねぬごとや夜はかなしき

秋の夜は露こそことにさむからし草むらごとに蟲のわぶれば

君しのぶ草にやつるる故郷はまつむしの音ぞかなしかりける

秋の野に道もまどひぬ松蟲のこゑするかたにやどやからまし

秋の野に人まつ蟲の聲すなりわれかと行きていざとぶらはむ
もみぢ葉の散りて積れる我が宿に誰をまつ蟲ここら鳴くらむ
蜩(ひぐらし)のなきつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける
ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

在原元方

初雁をよめる

待つ人にあらぬものから初雁のけさなく聲のめづらしきかな

友則

是貞のみこの家の歌合の歌

秋風に初雁がねぞきこゆなるたがたまづさをかけて來つらむ

讀人しらず

題しらず

我が門に稻おほせ鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁は來にけり
いと早も鳴きぬる雁か白露の色どる木々ももみぢあへなくに
春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりのうへに

夜を寒み衣かりがねなくなべにはぎの下葉もうつろひにけり

此歌は或人のいはく柿本人麿がなりと

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船は天のとわたる雁にぞありける

躬恒

雁のなきけるを聞きてよめる

うきことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋のよなよな

是貞のみこの家の歌合の歌

忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音にめをさましつつ

讀人しらず

おくやまに紅葉ふみわけなく鹿の聲きくときぞ秋はかなしき

題しらず

秋萩にうらびれをればあしびきの山したとよみ鹿の鳴くらむ

秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさ（きィ）
　是貞のみこの家の歌合によめる
秋萩のはな咲きにけりたかさごのをのへの鹿は今やなくらむ
　昔あひ知りて侍りける人の秋の野にて逢ひて物
　語しけるついでによめる　躬恒
あき萩のふるえにさける花みればもとの心はわすれざりけり
　題しらず　讀人しらず
秋萩の下葉色づくいまよりやひとりある人のいねがてにする
なきわたる雁の涙やおちつらむものおもふ宿の萩のうへの露
萩のつゆ玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ
　ある人のいはくこの歌は奈良の帝の御歌なりと（とをたをイ）
をりてみばおちぞしぬべき秋萩のえだもたわわにおける白露

萩が花ちるらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも
　是貞のみこの家の歌合によめる　文屋朝康
秋の野におく白露はたまなれやつらぬきかくるくもの糸すぢ
　題しらず　僧正遍昭
名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな
　僧正遍昭が許に奈良へまかりける時に男山にて
　女郎花を見てよめる　布留今道
女郎花うしとみつつぞゆきすぐる男山にしたてりとおもへば
　是貞のみこの家の歌合の歌　敏行朝臣
秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに
　題しらず　小野美材
女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

朱雀院の女郎花合に詠みて奉りける　左のおほいまうち君

をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ　藤原定方朝臣

秋ならであふことかたき女郎花あまの川原におひぬものゆゑ　貫之

たがあきにあらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移ろふ　躬恒

妻こふる鹿ぞなくなる女郎花おのがすむ野のはなとしらずや

女郎花ふきすぎてくる秋風は目には見えねど香こそしるけれ　忠岑

人の見ることやくるしき女郎花秋ぎりにのみたちかくるらむ

ひとりのみ眺むるよりは女郎花わがすむ宿にうゑて見ましを

物へまかりけるに人の家に女郎花うゑたりける　兼覽王

を見てよめる

女郎花うしろめたくも見ゆるかなあれたるやどに獨たてれば

寛平の御時藏人所のをのこども嵯峨野に花見む

とてまかりたりける時歸るとて皆歌よみけるつ　平貞文

いでによめる

花にあかでなに歸るらむ女郎花おほかる野邊にねなまし物を

是貞のみこの家の歌合の歌　敏行朝臣

何人かきてぬぎかけしふぢばかま來る秋ごとに野邊を匂はす

藤袴をよみて人に遣しける　貫之

やどりせし人のかたみか藤ばかま忘られがたき香に匂ひつつ

ふぢばかまをよめる　素性

ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも　平貞文

題しらず

今よりは植ゑてだに見じ花薄ほにいづる秋はわびしかりけり　在原むねやな

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

秋の野のくさのたもとか花薄ほにいでてまねく袖とみゆらむ　素性法師

われのみやあはれと思はむ蛬(きりぎりす)なくゆふかげのやまとなでしこ　讀人しらず

題しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

もも草の花のひもとく秋の野におもひたはれむ人なとがめそ

月草に衣はすらむあさ露にぬれてののちはうつろひぬとも

仁和の帝みこにおはしましける時ふるの瀧御覽

ぜむとておはしましける道に遍昭が母の家に宿り給へりける時に庭を秋の野につくりて御物(たほん)語のついでによみて奉りける　僧正遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれば庭もまがきも秋の野らなる

古今和歌集　卷第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌　文屋康秀

吹くからに秋の草木の萎るればむべ山風をあらしといふらむ

草も木も色かはれどもわたつ海の波のはなにぞ秋なかりける

秋の歌合しける時によめる　紀淑望

もみぢせぬときはの山は吹く風の音にや秋をききわたるらむ

題しらず　讀人しらず

霧たちて雁ぞなくなる片岡のあしたのはらはもみぢしぬらむ

神無月しぐれもいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびの森

ちはやぶる神なびやまのもみぢ葉に思はかけじうつろふ物を

貞觀の御時綾綺殿の前に梅の木ありけり西の方にさせりける枝のもみぢそめたりけるをうへにさぶらふをのこどものよみけるついでによめる　藤原勝臣

おなじえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋の初なりけれ

石山に詣でける時音羽山の紅葉を見てよめる　貫之

秋風のふきにし日よりおとは山みねのこずゑも色づきにけり

是貞のみこの家の歌合によめる　敏行朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢにそむらむ

あきの夜の露をばつゆとおきながら雁の涙や野邊をそむらむ　壬生忠岑

題しらず　讀人しらず

秋の露色々ことにおけばこそやまの木の葉のちぐさなるらめ　貫之

もる山のほとりにてよめる

しらつゆも時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり　在原元方

秋の歌とてよめる

雨ふれどつゆももらじを笠とりの山はいかでか紅葉そめけむ　貫之

神の社のあたりをまかりける時にいがきのうち

の紅葉を見てよめる

ちはやぶる神のい垣にはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり　忠岑

是貞のみこの家の歌合によめる

雨ふればかさとり山のもみぢ葉は行きかふ人の袖さへぞてる　讀人しらず

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

散らねどもかねてぞをしき紅葉は今はかぎりの色と見つれば

大和の國にまかりける時佐保山にきりのたてり

けるを見てよめる　紀友則

たがための錦なればか秋霧のさほのやまべをたちかくすらむ

是貞のみこの家の歌合のうた　讀人しらず

秋霧は今朝はなたちそさほやまの柞のもみぢよそにても見む

秋の歌とてよめる　坂上是則

さほ山のははその色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな

人の前栽に菊に結び附けて植ゑける歌　在原業平朝臣

うゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそちらめ根さへ枯れめや

寛平の御時菊の花をよませたまうける　敏行朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

この歌はまだ殿上ゆるされざりけるときに召しあげられて

つかうまつるとなむ

是貞のみこの家の歌合の歌　紀友則

露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋のひさしかるべく

寛平の御時后の宮の歌合の歌　大江千里

植ゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむとや見し

同じ御時せられける菊合に洲濱をつくりて菊の花植ゑたりけるにくはへたりける歌

吹上の濱に菊植ゑたりけるをよめる　菅原朝臣

秋風のふきあげにたてる白菊ははなかあらぬか波のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經にけむ

菊の花のもとにて人の人待てるかたをよめる　友則

花見つつ人まつ時はしろたへの袖かとのみぞあやまたれける

おほ澤の池のかたに菊植ゑたるをよめる

ひともとと思ひし花をおほさはの池の底にもたれか植ゑけむ

世の中のはかなきことを思ひける折に菊の花を見てよめる　貫之

秋の菊匂ふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

白菊の花をよめる　凡河内躬恒

こころあてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花

是貞のみこの家の歌合の歌　讀人しらず

いろかはる秋の菊をばひととせにふたたび匂ふ花とこそ見れ（かとぞ見るイ）

仁和寺に菊の花めしける時に歌そへて奉れと仰せられければよみて奉りける　平貞文

秋をおきて時こそ有りけれ菊の花移ろふからに色のまされば

人の家なりける菊の花を移し植ゑたりけるをよめる　貫之

咲きそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

題しらず　讀人しらず

さほ山の杵のもみぢ散りぬべみよるさへ見よと照らす月かげ

宮づかへ久しうつかうまつらで山里にこもり侍りけるによめる　藤原關雄

奥山のいはがき紅葉ちりぬべし照る日のひかり見る時なくて

題しらず　讀人しらず

たつたがは紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

此歌は或人奈良の帝(文武天皇)の御歌なりとなむ申す

龍田川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山にしぐれ降るらし

又はあすか川もみぢ葉流る　此歌不レ注二人麿歌一

戀しくば見てもしのばむ紅葉を吹きな散らしそ山おろしの風

秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬわれぞ悲しき

秋はきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみ分けてとふ人はなし

ふみわけて更にや訪はむ紅葉のふりかくしたる道と見ながら

秋の月やまべさやかにてらせるはおつる紅葉の數を見よとか

吹く風の色の千種に見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり　關雄

霜のたて露のぬきこそよわからしやまの錦の織ればかつちる

雲林院の木のかげにたたずみてよみける　僧正遍昭

わび人のわきて立ちよる木の下は頼むかげなく紅葉散りけり

二條の后の春宮の御息所と申しける時に御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる　素性

もみぢ葉のながれてとまるみなとには紅ふかき波やたつらむ（ぞたちけるぃ）　業平朝臣

ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなるに水くくるとは　是貞のみこの家の歌合の歌　敏行朝臣

我がきつる方も知られずくらぶ山木々のこの葉の散るとまがふに　忠岑

かみなびのみむろのやまを秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ　北山に紅葉折らむとてまかれりける時によめる　貫之

見るひともなくて散りぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり

秋の歌　兼覽王

龍田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ　小野といふ所にすみ侍りける時もみぢを見てよめる　貫之

あきのやま紅葉を幣（ぬさ）とたむくれば住むわれさへぞ旅心地する　神なび山を過ぎて龍田川を渡りける時に紅葉の流れけるをよめる　清原深養父

かみなびの山を過ぎゆく秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる　寛平の御時后の宮の歌合の歌　藤原興風

白波にあきの木の葉のうかべるをあまの流せる船かとぞ見る　龍田川のほとりにてよめる　坂上是則

もみぢ葉の流れざりせば龍田川みづの秋をばたれか知らまし

志賀の山越にてよめる　春道列樹

山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり

池のほとりにて紅葉のちるをよめる　躬恒

風ふけばおつるもみぢ葉水きよみちらぬ影さへ底に見えつつ

亭子院の御屏風の繪に川渡らむとする人の紅葉のちる木のもとに馬をひかへて立てるをよませ給ひければつかうまつりける

立ちとまり見てをわたらむ紅葉は雨と降るとも水はまさらじ　忠岑

是貞のみこの家の歌合の歌

山田もる秋のかり庵におくつゆはいなおほせ鳥の涙なりけり　讀人しらず

題しらず

ほにもいでぬ山田をもるとふぢ衣稲葉の露にぬれぬ日はなし

刈れる田に生ふる穭（ひつぢ）のほに出ぬは世を今更にあき果てぬとか（やィ）

北山に僧正遍昭と茸狩にまかれりけるによめる　素性法師

もみぢ葉は袖にこき入れてもて出なむ（いなむィ）秋は限と見む人のため

寛平の御時ふるき歌奉れとおほせられければ龍田川もみぢ葉流るといふ歌を書きてその同じ心をよめりける　興風

みやまより落ちくる水の色みてぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

秋のはつる心を龍田川に思ひやりてよめる　貫之

年ごとにもみぢ葉ながる龍田川（すィ）みなとや秋のとまりなるらむ

ながの月のつごもりの日大井にてよめる

ゆふづくよをぐらの山になく鹿の聲のうちにや秋はくるらむ

同じつごもりの日よめる　躬恒

道しらば尋ねも行かむもみぢ葉を幣とたむけて秋はいにけり

古今和歌集　巻第六

冬　歌

題しらず　讀人しらず

たつた川にしきおりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

冬の歌とてよめる　源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬとおもへば

題しらず　讀人しらず

おほぞらの月の光しきよければかげ見し水ぞまづこほりける

夕されば衣手さむしみよしのの吉野のやまにみゆきふるらし

今よりはつぎて降らなむわが宿のすすきおしなみふれる白雪

ふる雪はかつぞけぬらし足びきの山の瀧つ瀬おとまさるなり
この川にもみぢばながる奥山のゆきげの水ぞいままさるらし
ふるさとは吉野の山しちかければ一日もみ雪ふらぬ日はなし
我が宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

冬の歌とてよめる　紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬはなぞ咲きける

志賀の山ごえにてよめる　紀あきみね

白雪のところもわかず降りしけば巌にも咲くはなとこそ見れ

奈良の京にまかれりける時に宿りける所にてよめる　坂上是則

みよしのの山のしら雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり

寛平の御時后の宮の歌合の歌　藤原興風

浦ちかく降りくる雪はしらなみのするゑの松山こすかとぞ見る　壬生忠岑

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

白雪のふりてつもれるやま里はすむ人さへやおもひきゆらむ

雪のふるを見てよめる　凡河内躬恒

雪ふりて人もかよはぬ道なれや跡はかもなくおもひ消ゆらむ

雪のふりけるをよみける　清原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

雪の木に降りかかれりけるを詠める　貫之

冬ごもり思ひかけぬを木のまより花とみるまで雪ぞふりける

大和の國にまかれりける時に雪の降りけるを見てよめる　坂上是則

あさぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里に降れるしらゆき　讀人しらず

題しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め

梅のはなそれとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

此歌は或人のいはく柿本人麿が歌なり　小野篁朝臣

梅の花に雪のふれるをよめる

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく　紀貫之

雪のうちの梅の花をよめる

梅の香の降りおける雪に紛ひせば誰かことごと分きて折らまし　紀友則

ゆきのふりけるを見てよめる

雪ふれば木毎に花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし

物へまかりける人を待ちてしはすのつごもりに

よめる

我がまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず　恒

年のはてによめる　在原元方

あらたまの年の終になるごとに雪もわが身もふりまさりつつ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　讀人しらず

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

年のはてによめる　春道列樹

昨日といひ今日と暮してあすか川ながれて早き月日なりけり

歌奉れと仰せられし時によみて奉れる　紀貫之

行く年の惜くもあるかなます鏡みる影さへにくれぬと思へば

古今和歌集 巻第七

賀歌

題しらず　　讀人しらず

我が君は千世に八千世にさされ石の巖となりて苔のむすまで
わたつ海の濱の眞砂を數へつつ君が千とせのありかずにせむ
しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞ鳴く
我が齡君がやちよにとり添へてとどめおきてば思ひでにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌

かくしつつとにもかくにも長らへて君が八千代に逢ふ由もがな

仁和の帝のみこにおはしましける時に御をばの

八十の賀にしろがねを杖につくれりけるを見て　　僧正遍昭

かの御をばにかはりてよめる

千早ぶる神やきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり

堀河のおほいまうちぎみの四十の賀九條の家に　　在原業平朝臣

てしける時によめる

櫻花ちりかひ曇れおいらくの來むといふなるみちまがふがに

さだときの皇子のをばの四十の賀を大井にてし　　紀これをか

ける日よめる

龜のをのやまのいはねをとめておつる瀧の白玉千世の數かも

さだやすのみこの后の宮の五十の賀奉りける御

屏風に櫻の花のちる下に人の花見たるかた書け

るをよめる　　藤原興風

いたづらに過ぐる月日はおもほえで花見て暮す春ぞすくなき
　もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみて書きける　紀貫之

春くれば宿にまづ咲く梅のはな君がちとせのかざしとぞ見る　素性法師

古へにありきあらずは知らねども千年のためし君にはじめむ
ふして思ひおきてかぞふる萬世は神ぞしるらむわが君のため
　藤原三善（みよし）が六十の賀によみける　在原滋春

鶴かめも千年ののちは知らなくにあかぬ心にまかせ果ててむ
　此歌は或人在原のときはるがともいふ

良岑のつねなりが四十の賀にむすめにかはりてよみ侍りける　素性法師

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年のかげに住まむと思へば
　内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に四季の繪かける後（うしろ）の屏風にかきたりける歌

春

かすが野に若菜つみつつ萬代をいはふこころは神ぞしるらむ　躬恒

やまたかみ雲井に見ゆる櫻花こころのゆきて折らぬ日ぞなき　友則

夏

めづらしき聲ならなくに郭公ここらの年をあかずもあるかな　躬恒

秋

すみの江の松をあきかぜ吹くからに聲うちそふる沖つしら波　忠岑

千鳥鳴くさほの川霧たちぬらし山の木の葉もいろまさりゆく　是則

秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける　貫之

冬

白雪の降りしくときはみよしののやました風に花ぞちりける

春宮の生れたまへりける時にまゐりてよめる　典侍藤原よるかの朝臣

みねたかき春日の山にいづる日はくもる時なく照すべらなり

古今和歌集　巻第八

離別歌

題しらず　在原行平朝臣

立ち別れいなばの山の嶺に生ふるまつとしきかば今歸りこむ

すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ　讀人しらず

かぎりなきくもゐのよそに別るとも人を心におくらさむやは

小野のちふるが陸奥の介にまかりける時に母のよめる

たらちねの親のまもりとあひ添ふる心ばかりは關なとどめそ

さだときのみこの家にて藤原のきよふが近江の介にまかりける時にむまのはなむけしけるよる　紀としさだ

よめる

今日別れあすはあふみと思へども夜や更けぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人によみて遣しける

かへるやまありとは聞けど春霞たちわかれなば戀しかるべし　紀貫之

人のむまのはなむけにてよめる

をしむから戀しきものを白雲の立ちなむのちはなに心地せむ

ともだちの人の國へまかりけるによめる　在原滋春

別れては程をへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

あづまの方へまかりける人によみて遣しける　いかこのあつゆき

思へども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

逢坂にて人を別れける時に詠める　なにはのよろづを

あふさかの關しまさしき物ならばあかず別るる君をとどめよ　讀人しらず

題しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてし行けばけぬべきものを

この歌はある人つかさをたまはりてあたらしき妻につきて年經て住みける人をすててただ明日なむ立つとばかりいへりけるときにともかくもいはでよみて遣しける

常陸へまかりけるときに藤原公利によみてつかはしける　寵

朝なけに見べききみとしたのまねばおもひたちぬる草枕なり

紀のむねさだがあづまへまかりける時に人の家に宿りて曉いでたつとてまかり申しければ女の

よみていだせりける　讀人しらず

えぞ知らぬいま心みよ命あらばわれやわするる人やとはぬと

あひ知りて侍りける人のあづまの方へまかりけるをおくるとてよめる　深養父

くもゐにも通ふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

友のあづまへまかりける時によめる　良岑ひでをか

しらくものこなたかなたにたち別れ心をぬさとくだく旅かな

みちのくにへまかりける人によみて遣しける　貫之

白雲のやへにかさなるをちにても思はむ人にこころへだつな

人を別れける時によめる

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみて佗しかるらむ

あひしれりける人のこしの國にまかりて年へて京にまうできて又歸りける時によめる　凡河内躬恒

歸山何ぞはありてあるかひは來ても留らぬ名にこそありけれ

こしの國にまかりける人によみてつかはしける

外にのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬ我が身は

音羽山のほとりにて人を別るとてよめる　貫之

おとはやまこだかくなきて郭公きみがわかれを惜むべらなり

藤原の後蔭がから物の使に長月のつごもり方にまかりけるに上のをのこども酒たうびけるついでによめる　藤原かねもち

もろともに鳴きてとどめよ蜚秋のわかれは惜しくやはあらぬ

秋霧のともに立ちいでて別れなば晴れぬ思に戀ひやわたらむ　平もとのり

源のさねがつくしへ湯あみむとてまかりける時
に山崎にてわかれ惜みける所にてよめる　しろめ
いのちだに心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし
山崎より神なびの森まで送りに人々まかりて歸
りがてにしてわかれ惜みけるによめる　源さね
人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りなむ
今は是より歸りねとさねがいひけるをりによみ
ける　藤原かねもち
慕はれて來にし心の身にしあれば歸るさまには道も知られず
藤原のこれをかが武藏の介にまかりける時に送
りに逢坂を越ゆとてよみける　貫之
かつ越えて別れもゆくか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

大江の千古が越へ罷りける馬の餞(はなむけ)によめる　藤原兼輔朝臣
君が行くこしの白山しらねども雪のまにまにあとはたづねむ
人の花山に詣うできて夕さりつかた歸りなむと
しける時によめる　僧正遍昭
夕暮のまがきは山と見えななむ夜は越えじとやどりとるべく
山に登りて歸りまうできて人々別れけるついで
によめる　幽仙法師
わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまにまに
雲林院のみこの舍利會に山に登りて歸りけるに
櫻の花のもとにてよめる　僧正遍昭
山風に櫻ふきまきみだれなむはなのまぎれに立ちとまるべく
幽仙法師

ことならば君留るべく匂はなむ歸すは花の憂きにやはあらぬ
　仁和の帝みこにおはしましける時にふるの瀧御覽じにおはしまして歸り給ひけるに詠める　兼藝法師
あかずして別るる涙たきにそふ水まさるとやしもは見ゆらむ
　かんなりのつぼにめしたりける日おほみきなどたうべて雨のいたう降りければ夕さりまで侍りてまかり出で侍りける折にさかづきをとりて　貫之
秋萩のはなをば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ
　とよめりけるかへし　兼覽王
をしむらむ人の心をしらぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける
　兼覽のおほぎみに初めて物語して別れける時によめる　躬恒

別るれど嬉しくもあるか今宵よりあひみぬ先に何を戀ひまし
　題しらず　讀人しらず
あかずしてわかるる袖の白玉は君がかたみとつつみてぞゆく
かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじあはむ日までに
かきくらしことは降らなむ春雨にぬれぎぬきせて君をとどめむ
しひて行くひとをとどめむ櫻花いづれを道とまどふまでちれ
　志賀の山越にて石井のもとにて物いひける人の別れける折によめる　貫之
むすぶ手の雫ににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな
　道にあへりける人の車に物いひつきて別れける所にてよめる　友則
下の帶の道はかたがた別るとも行き廻りても逢はむとぞ思ふ

古今和歌集　卷第九

羇旅歌

もろこしにて月を見てよみける　安倍仲麿

あまの原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山にいでし月かも

この歌はむかし仲麿を唐土に物ならはしに遣したりけるに
あまたの年を經てえ歸りまうでこざりけるをこの國より又
使まかりいたりけるにたぐひてまうできなむとて出でたり
けるにめい州といふ所の海邊にてかの國の人むまのはなむ
けしけりよるになりて月のいと面白くいでたりけるを見て
よめるとなむ語り傳ふる

おきの國に流されける時に船にのりていでたつ　小野篁朝臣

とて京なる人の許に遣しける

わたの原八十島かけてこぎいでぬと人には告げよ蜑のつり舟

題しらず　讀人しらず

都いでて今日みかのはらいづみ川かはかぜさむし衣かせやま
ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行くふねをしぞおもふ

此歌はある人のいはく柿本人麿がなり

あづまの方へ友とする人一人二人いざなひて
きけり三河國八橋といふ所にいたれりけるにそ
の川のほとりに杜若いと面白うさけりけるを見
て木の陰におりゐて杜若といふ五文字を句のか
しらにするゑて旅の心をよまむとてよめる　在原業平朝臣

唐衣きつつなれにし妻しあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

武藏の國と下總の國との中にある隅田川の邊に到りて都のいと戀しう覺えければしばし川のほとりにおりゐて思ひやれば限りなく遠くも來にけるかなと思ひわびてながめをるに渡守はや舟に乘れ日も暮れぬといひければ舟に乘りて渡らむとするに皆人物わびしくて京に思ふ人なくしもあらずさる折に白き鳥のはしと足と赤き川のほとりに遊びけり京には見えぬ鳥なりければ皆人見しらず渡守にこれは何鳥ぞと問ひければこれなむ都鳥といひけるを聞きてよめる

名にしおはばいざことはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと

題しらず　讀人しらず

北へゆく雁ぞ鳴くなるつれてこし數はたらでぞ歸るべらなる

此歌はある人男女もろともに人の國へまかりけり男まかりいたりて即みまかりにければ女ひとり京へ歸る道に雁の鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ

あづまの方より京へまうでくとて道にてよめる　お　と

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

越の國へまかりけるとき白山を見てよめる　躬恒

消えはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける

あづまへまかりける時道にてよめる　貫之

糸によるものならなくに別れ路の心ぼそくもおもほゆるかな

甲斐の國へまかりける時道にてよめる　躬恒

夜をさむみ置くはつ霜をはらひつつ草の枕にあまたたびねぬ
　但馬の國の湯へまかりける時にふたみの浦といふ所にとまりて夕さりのかれいひたうべけるに共にありける人々歌よみけるついでによめる　藤原かねすし

夕月夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそみめ
　惟喬のみこのともに狩にまかりける時に天の川といふ所の川のほとりにおりゐて酒など飲みけるついでに皇子のいひけらく狩して天の川原にいたるといふ心をよみて盃はさせと云ひければよめる　在原業平朝臣

狩り暮したなばたつめに宿からむ天の川原にわれは來にけり
　みここの歌をかへすがへすよみつつかへしえせずなりにければともに侍りてよめる　紀有常

ひととせにひとたびきます君まてば宿かす人もあらじとぞおもふ
　朱雀院の奈良におはしましける時に手向山にてよめる　菅原朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山もみぢの錦神のまにまに
　素性法師

手向にはつづりの袖も著るべきに紅葉にあける神やかへさむ

古今和歌集　巻第十

物名

うぐひす

心から花のしづくにそぼちつつうくひすとのみ鳥の鳴くらむ　藤原敏行朝臣

ほととぎす

くべきほどときすぎぬれや待ちわびて鳴くなる聲の人をとよむる　在原しげはる

うつせみ

波のうつせみれば玉ぞみだれける拾はば袖にはかなからむや　壬生忠岑

かへし

袂より離れて玉をつつまめやこれなむそれとうつせみむかし

うめ

あなうめに常なるべくも見えぬかな戀しかるべき香は匂ひつつ　讀人しらず

かにはざくら

かづけども波のなかにはさぐられで風吹くごとに浮き沈む玉　貫之

すもものの花

今幾日春しなければうぐひすもものはながめて思ふべらなり　深養父

からももの花

あふからももものはなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば　小野しげかげ

たちばな

足引の山たちはなれ行く雲のやどり定めぬ世にこそありけれ　友則

をかたまの木

み吉野の吉野の瀧に浮びいづる泡をかたまのきゆと見ゆらむ

山がきの木

秋はきぬ今やまがきのきりぎりす夜な夜ななかむ風の寒さに　讀人しらず

あふひ　かつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかがつらしと思はざるべき

人めゆゑ後にあふひの遙けくばわがつらきにや思ひなされむ　僧正遍昭

くたに

散りぬれば後はあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな　貫之

さうび

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり　友則

をみなへし

しら露を玉にぬくとやささがにの花にも葉にも糸をみなへし

朝露をわけそぼちつつ花見むといまぞ野山をみなへしりぬる

朱雀院の女郎花あはせの時にをみなへしといふ

五文字を句のかしらに置きてよめる　貫之

をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

きちかうの花　友則

あきちかうのはなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく

しをに　讀人しらず

ふりはへていざ故郷の花見むとこしをにほひぞ移ろひにける

りうたんの花　友則

我が宿の花ふみしだくとりうたんのはなければやここにしもくる

をばな　讀人しらず

ありと見てたのむぞ難き空蟬の世をばなしとや思ひなしてむ

けにごし　矢田部名實

うちつけにこしとや花の色をみむおく白露のそむるばかりを

二條の后春宮の御息所と申しける時にめどにけづり花させりけるをよませ給ひける　文屋康秀

花の木にあらざらめども咲きにけりふりにし果なる時もがな　紀としさだ

しのぶぐさ

山高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞ散りける　平あつゆき

やまし

郭公みねの雲にやまじりにし有りとは聞けど見るよしもなき　讀人しらず

からはぎ

空蟬のからはきごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき　深養父

かはなぐさ

うば玉の夢になにかはなぐさまむうつつにだにもあかぬ心を

さがりごけ

花の色は唯ひとさかりこけれどもかへすがへすぞ露はそめける　滋春

にがたけ

命とて露をたのむにかたければものわびしらになく野邊の蟲　景式王

かはたけ

さよふけてなかばたけゆくひさかたの月吹きかへせ秋の山風　素性法師

わらび

煙たち燃ゆとも見えぬ草の葉を誰かわらびと名づけそめけむ　紀のめのと

ささ　まつ　びは　ばせをば

いささめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつつ　兵衛

なし　なつめ　くるみ

あぢきなし歎きなつめそ憂き事にあひくるみをば捨てぬ物から

たかむこのとしはる

からことといふ所にて春の立ちける日よめる　安倍清行朝臣

波のおとのけさからことにきこゆるは春のしらべや改るらむ

いかが崎　兼覽王

かぢにあたる椿の雫を春なればいかがさき散る花と見ざらむ

からさき　阿保のつねみ

かの方にいつからさきに渡りけむ波路はあとも殘らざりけり

伊勢

波の花おきからさきて散りくめり水の春とはかぜやなるらむ

紙屋川　貫之

うばたまの我がくろかみやかはるらむ鏡のかげにふれる白雪

よど川

あしがきの山邊にをれば白雲のいかにせよとかはるる時なき

かた野　忠岑

なつぐさのうへはしげれる沼水のゆくかたのなきわが心かな

桂の宮　源ほどこす

秋くれど月のかつらのみやはなる光をはなとちらすばかりを

百和香　讀人しらず

花毎にあかず散らしし風なれば幾そばくわがうしとかは思ふ

すみながし　滋春

春がすみなかし通ひ路なかりせば秋くる雁はかへらざらまし

おき火　都良香

流れいづるかただに見えぬ涙川おきひむ時やそこは知られむ

ちまき　大江千里

のちまきの後れて生ふる苗なれどあだにはならぬ頼とぞ聞く

はをはじめるをはてにてながめをかけて時の歌

よめと人のいひければよめる　僧正聖寶

はなのなかめにあくやとて分けゆけば心ぞ共にちりぬべらなる。

古今和歌集　卷第十一

戀歌一

題しらず　讀人しらず

郭公鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬこひもするかな　素性法師

音にのみきくの白露夜はおきて晝はおもひにあへずけぬべし　紀貫之

吉野川いはなみたかくゆく水のはやくぞ人をおもひそめてし　藤原勝臣

白波のあとなきかたに行く船も風ぞたよりのしるべなりける

音羽山おとに聞きつつあふさかの關のこなたに年をふるかな　在原元方

立ちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら波　貫之

世の中はかくこそありけれ吹く風のめに見ぬ人も戀しかりけり

右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車の下簾より女の顔のほのかに見えければよみて遣しける　在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日や眺め暮さむ

かへし　讀人しらず

知る知らぬ何かあやなく分きていはむ思のみこそしるべなりけれ

春日の祭にまかれりける時に物見に出でたりける女のもとに家を尋ねて遣しける　壬生忠岑

春日野の雪まを分けておひ出くる草のはつかに見えし君かも

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後によみてつかはしける　貫之

山櫻かすみのまよりほのかにも見てしひとこそ戀しかりけれ

題しらず　元方

たよりにもあらぬおもひの怪しきは心を人につくるなりけり　凡河内躬恒

初雁のはつかに聲をききしよりなかぞらにのみ物を思ふかな　貫之

逢ふ事は雲井はるかになる神の音にききつつ戀ひわたるかな　讀人しらず

片糸をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせん
ゆふぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を戀ふとて
かりごもの思ひ亂れてわが戀ふと妹しるらめや人しつげずば
つれもなき人をやねたく白露のおくとはなけきぬとは忍ばむ
千早ぶる賀茂の社のゆふだすきひとひも君をかけぬ日はなし
わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし
駿河なるたごの浦波たたぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし
夕づく夜さすや岡邊の松の葉のいつともわかぬ戀もするかな
あしびきの山下みづのこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる
吉野川いはきりとほしゆく水の音にはたてじ戀ひはしぬとも
瀧つ瀬の中にもよごはありてふをなごわが戀の淵瀬ともなき
山高みしたゆく水の下にのみながれてこひむ戀ひはしぬとも

思ひ出づるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しき物を
人しれず思へばくるしくれなゐのすゑつむ花の色にいでなむ
秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや戀ひむあふよしをなみ
わがそのの梅のほづえに鶯のねに鳴きぬべきこひもするかな
あしびきのやま郭公わがごとや君にこひつついねがてにする
夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下もえにせむ
戀せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけらしも
哀てふ事だになくばなにをかは戀のみだれのつかねをにせむ
思ふには忍ぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを
我が戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ
あさぢふのをのの篠原忍ぶともひと知るらめやいふ人なしに
ひと知れぬ思やなぞと蘆垣のまぢかけれどもあふよしのなき

思ふとも戀ふとも逢はむ物なれやゆふ手もたゆくとくる下紐
いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ
伊勢の海につりする蜑のうけなれや心ひとつを定めかねつる
いせの海の蜑のつりなは打ちはへて苦しとのみや思ひ渡らむ
涙川なにみなかみをたづねけむ物思ふときのわが身なりけり
種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひばあはざらめやも
朝な朝なたつ川霧の空にのみうきておもひのある世なりけり
忘らるる時しなければあしたづの思ひ亂れてねをのみぞなく
から衣ひもゆふぐれになるときはかへすがへすぞ人は戀しき
よひよひに枕さだめむ方もなしいかにねし夜か夢に見えけむ
戀しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞ有るべかりける
人の身もならはし物をあはずしていざ心みむ戀ひや死ぬると

忍ぶれば苦しきものを人しれずおもふてふこと誰にかたらむ
來む世にもはやなりななむ目の前につれなき人を昔と思はむ
つれもなき人を戀ふとて山彦のこたへするまで歎きつるかな
ゆく水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり
人を思ふ心はわれにあらねばや身の惑ふだに知られざるらむ
おもひやるさかひ遙になりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき
夢のうちにあひみむ事を頼みつつ暮らせる宵はねむ方もなし
戀ひ死ねとする業ならしむば玉の夜はすがらに夢に見えつつ
涙川まくら流るるうきねには夢もさだかに見えずぞありける
戀すればわが身は影となりにけりさりとて人にそはぬ物ゆゑ
篝火にあらぬわが身のなぞもかく泪のかはにうきて燃ゆらむ
篝火のかげとなる身のわびしきは流れて下にもゆるなりけり

早き瀬にみるめおひせばわが袖の涙のかはに植ゑましものを
おきべにもよらぬ玉藻の波の上に亂れてのみや戀ひ渡りなむ
蘆鴨のさわぐ入江のしらなみの知らずや人をかくこひむとは
人しれぬ思をつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ
とぶ鳥のこゑもきこえぬ奥山のふかきこころを人は知らなむ
逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人やこひしき音のみなくらむ
あふさかの關に流るるいはしみづいはで心におもひこそすれ
浮草のうへはしげれる淵なれやふかきこころを知る人のなき
うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ
心がへするものにもが片戀はくるしきものとひとに知らせむ
よそにして戀ふれば苦しいれひものおなじ心にいざ結びてむ
はるたてば消ゆる氷ののこりなくきみが心はわれにとけなむ

明けたてば蟬のをりはへなきくらしよるは螢のもえこそ渡れ
夏蟲の身をいたづらになす事も一つおもひによりてなりけり
夕ぐれはいとどひがたき我が袖に秋の露さへおきそはりつつ
いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり
秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心にわすれしもせむ
秋の田のほの上をてらす稻妻のひかりのまにもわれや忘るる
人めもる我かはあやな花薄などかほにいでて戀ひずしもあらむ
あわ雪のたまればがてにくだけつつ我が物思のしげき頃かな
奥山のすがのねしのぎ降る雪のけぬとかいはむ戀のしげきに

古今和歌集　巻第十二

戀歌二

題しらず　小野小町

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせば覺めざらましを

うたたねに戀しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

いとせめて戀しきときはむば玉のよるの衣をかへしてぞきる　素性法師

秋風の身にさむければつれもなき人をぞ頼むくるる夜ごとに

しもつ出雲寺に人のわざしける日眞せい法師の導師にていへりけることばを歌によみて小野小町がもとに遣しける　安倍清行朝臣

つつめども袖にたまらぬしらたまは人をみぬめの涙なりけり　小町

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつ瀬なれば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原敏行朝臣

戀ひわびてうちぬる中に行き通ふ夢のただぢはうつつならなむ

住の江のきしによる波よるさへや夢のかよひ路人目よくらむ　小野のよしき

我が戀はみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなき　紀友則

宵のまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひまされる戀もするかな

夕されば螢よりけに燃ゆれどもひかりみねばや人のつれなき

笹の葉におく霜よりもひとりぬる我が衣手ぞさえまさりける　壬生忠岑

我が宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しかりける

川の瀬になびく玉藻のみがくれて人にしられぬ戀もするかな

かきくらし降る白雪の下ぎえにきえて物思ふ頃にもあるかな　藤原興風

君こふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞわれはなりける

死ぬる命いきもやすると試に玉の緒ばかりあはむといはなむ

佗びぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

わりなくも寐ても覺めても戀しきか心をいづちやらば忘れむ　讀人しらず

戀しきにわびて魂まどひなばむなしきからの名にやのこらむ

君こふる涙しなくばからころもむねのあたりは色もえなまし　紀貫之

題しらず

よとともにながれてぞゆく涙川ふゆも氷らぬみなわなりけり

夢路にもつゆや置くらむよもすがら通へる袖のひぢて乾かぬ　素性法師

はかなくて夢にもひとを見つる夜は朝の床ぞおきうかりける　藤原忠房

いつはりの涙なりせばから衣しのびにそではしぼらざらまし　大江千里

音になきてひぢにしかども春雨に濡れにし袖と問はば答へむ　敏行朝臣

我がごとく物やかなしき郭公ときぞともなく夜ただ鳴くらむ　貫之

さつきやま梢を高みほととぎす鳴く音そらなる戀もするかな　凡河内躬恒

秋霧のはるる時なきこころにはたちゐの空もおもほえなくに　清原深養父

蟲のごと聲にたてては鳴かねども涙のみこそしたにながるれ

是貞のみこの家の歌合の歌　讀人しらず

秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我おとらめやひとりぬる夜は　貫之

題しらず

秋の野にみだれて咲ける花の色のちぐさに物を思ふころかな　躬恒

ひとりしてものを思へば秋の田の稻葉のそよといふ人のなき　深養父

人をおもふ心は雁にあらねども雲井にのみも鳴きわたるかな　忠岑

秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ　貫之

まこもかる淀の澤水雨ふればつねよりことにまさる我がこひ

大和に侍りける人に遣しける

越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたるかな

やよひばかりに物のたうびける人のもとにまた

人まかりてせうそこすと聞きてよみてつかはし

ける

露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとにものおもひぞつく
　　題しらず　　坂上是則

わが戀にくらぶのやまの櫻花まなく散るともかずはまさらじ
　　むねをかの大頼

冬川のうへはこほれるわれなれや下に流れてこひわたるらむ
　　忠岑

たきつ瀬にねざしとどめぬ浮草のうきたる戀も我はするかな
　　友則

よひよひにぬぎて我がぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ

敷妙の枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひずぞありける

年をへて消えぬおもひはありながらよるの袂はなほ氷りけり

我が戀はしらぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける
　　貫之

くれなゐのふりいでてなく涙には袂のみこそいろまさりけれ

白玉とみえし涙もとしふればからくれなゐにうつろひにけり
　　躬恒

夏蟲をなにかいひけむ心からわれもおもひに燃えぬべらなり
　　忠岑

風ふけばみねにわかるる白雲のたえてつれなき君がこころか

月影にわが身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見む
　　深養父

戀ひ死なばたが名はたたじ世の中の常なき物といひはなすとも
　　貫之

津の國の難波の蘆のめもはるにしげきわがこひ人しるらめや　友則

手もふれで月日へにける白眞弓おきふし夜はいこそねられね　躬恒

人しれぬ思のみこそわびしけれわがなげきをば我のみぞ知る　友則

言にいでていはぬばかりぞ水無瀬川下に通ひて戀しきものを　躬恒

君をのみおもひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり　忠岑

命にもまさりて惜しくある物はみはてぬ夢の覺むるなりけり　春道列樹

梓弓ひけばもとすゑ我がかたによるこそまされ戀のこころは　躬恒

我が戀は行方も知らず果もなし逢ふをかぎりと思ふばかりぞ　深養父

われのみぞ悲しかりける彦星も逢はてすぐせる年しなければ　躬恒

今ははや戀ひしなましをあひみむと頼めしことぞ命なりける　躬恒

たのめつつあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ　友則

命やはなにぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくに

古今和歌集 巻第十三

戀歌三

やよひのついたちよりしのびに人に物をいひて後に雨のそぼ降りけるに詠みて遣しける　業平朝臣

起きもせず寐もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮しつ

業平朝臣の家に侍りける女のもとによみて遣しける　敏行朝臣

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふよしもなし

彼の女に代りてかへしによめる　業平朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながるるときかばたのまむ

題しらず　讀人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかげとなりにき

徒に行きてはきぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ

逢はぬ夜のふる白雪とつもりなばわれさへ共にけぬべき物を

此歌はある人のいはく柿本人麿が歌なり

秋の野に笹分けし朝の袖よりもあはでこし夜ぞひぢ増りける　業平朝臣

みるめなきが我身をうらと知らねばやかれなで蟹の足たゆくくる　小野小町

逢はずして今宵あけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ　源宗于朝臣

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別よりあかつきばかり憂きものはなし　在原元方

逢ふ事のなぎさにしよる波なればうらみてのみぞ立ち歸りける　讀人しらず

かねてより風に先だつ波なれや逢ふ事なきにまだき立つらむ　忠岑

みちのくにありといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり　みはるのありすけ

あやなくてまだき無き名の立田川渡らでやまむ物ならなくに　元方

人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとをいはむ　讀人しらず

こりずまに又も無き名はたちぬべし人にくからぬ世にし住へば

東(ひんがし)の五條わたりに人を知りおきて罷り通ひけり

忍びなる所なりければ門よりしもえいらで垣のくづれより通ひけるをたび重りければ主人(あるじ)聞きつけてかの道に夜毎に人をふせて守らすればいきけれどえあはでのみ歸りてよみてやりける　業平朝臣

人しれぬ我が通ひ路の關守はよひよひごとにうちもねななむ　貫之

題しらず

忍ぶれどこひしき時はあしびきの山より月のいでてこそくれ　讀人しらず

戀ひこひて稀に今宵ぞ逢坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ　小野小町

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬる物を　凡河内躬恒

長しともおもひぞはてぬ昔よりあふ人からのあきの夜なれば　讀人しらず

しののめのほがらほがらと明けゆけば己がきぬぎぬなるぞ悲しき　藤原國經朝臣

明けぬとていまはの心つくからになどいひ知らぬ思そふらむ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　敏行朝臣

あけぬとて歸る道にはこきたれてあめも涙も降りそほちつつ

題しらず　寵

しののめの別を惜みわれぞまづ鳥よりさきになきはじめつる　讀人しらず

ほととぎす夢かうつつか朝露のおきて別れしあかつきのころ

玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜深くこしを人みけむかも　大江千里

今朝はしもおきけむ方もしらざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき

人に逢ひてあしたによみて遣しける　業平朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり增る哉

業平朝臣の伊勢の國にまかりける時齋宮なりける

る人にいとみそかに逢ひて又のあしたに人やる

すべなくて思ひをりける間に女のもとよりおこ

せたりける　讀人しらず

君やこしわれやゆきけむおもほえず夢か現かねてか夢めてか

かへし　業平朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは世人さだめよ
　　題しらず　　讀人しらず

むば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらも優らざりけり
さ夜更けて天のと渡る月かげにあかずも君をあひ見つるかな
君が名も我が名もたてじ難波なるみつともいふな逢ひきともいはじ
名取川瀬々の埋木あらはればいかにせむとか逢ひみそめけむ
吉野川みづの心ははやくともたきの音にはたてじとぞおもふ
戀しくばしたにを思へむらさきの根ずりの衣色にいづなゆめ
　　小野春風

花薄ほに出てこひば名ををしみ下ゆふひものむすぼほれつつ
　　橘のきよきが忍びにあひしれりける女のもとよ
りおこせたりける　　讀人しらず

思ふどちひとりひとりが戀ひ死なばたれによそへて藤衣きむ
　　かへし　　橘清樹

泣きこふる涙に袖のそぼちなばぬぎかへがてら夜こそは著め
　　題しらず　　小町

現にはさもこそあらめ夢にさへひとめをもると見るが佗しさ
限なきおもひのままによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ
夢路には足もやすめず通へども現にひとめ見しことはあらず
　　讀人しらず

思へども人めつつみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね
たきつせの早き心をなにしかも人めつつみのせきとどむらむ
　　寛平の御時后の宮の歌合の歌　　紀友則

くれなゐの色には出でじかくれぬの下に通ひて戀は死ぬとも

題しらず　躬恒

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな

笹の葉におく初霜の夜をさむみはつくとも色に出でめや　讀人しらず

山しなの音羽の山のおとにだに人のしるべくわが戀ひめかも

此歌ある人近江のうねめのとなむ申す　清原深養父

滿つ汐の流れひるまを逢ひ難みみるめの浦によるをこそまて　平貞文

白川波のしらずともいはじ底清み流れてよよにすまむと思へば　友則

したにのみ戀ふれば苦し玉の緒の絶えて亂れむ人なとがめそ

我が戀を忍びかねてはあしびきの山たちばなの色に出ぬべし　讀人しらず

大方は我が名もみなと漕ぎ出なむよをうみべだにみるめ少なし　平貞文

枕よりまた知るひともなき戀を涙せきあへずもらしつるかな　讀人しらず

風ふけば波うつ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり

此歌は或人のいはく柿本人麿がなり

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれど顯れにけり

あふことは玉の緒ばかり名のたつは吉野の川の瀧つ瀬のごと

村鳥の立ちにし我が名今更にことなしぶともしるしあらめや

君により我が名は花に春がすみ野にも山にも立ちみちにけり

知るといへば枕だにせでねし物を塵ならぬ名の空に立つらむ　伊勢

古今和歌集　卷第十四

戀歌四

題しらず　讀人しらず

みちのくの淺香の沼の花がつみかつ見る人に戀ひやわたらむ

あひみずば戀しき事もなからまし音にぞ人を聞くべかりける　貫之

いそのかみふるの中道なかなかに見ずば戀しと思はましやは　藤原ただゆき

君といへば見まれみずまれ富士の嶺の珍らしげなく燃ゆるわが戀　伊勢

夢にだに見ゆとはみえじ朝な朝な我が面影にはづる身なれば　讀人しらず

石間ゆく水の白波立ち返りかくこそは見めあかずもあるかな

伊勢の蜑の朝な夕なに潜(かづ)くてふみるめに人を飽くよしもがな　友則

春霞たなびく山のさくらばな見れどもあかぬ君にもあるかな　深養父

心をぞわりなきものと思ひぬる見るものからや戀しかるべき　凡河内躬恒

かれはてむ後をば知らで夏草のふかくも人のおもほゆるかな　讀人しらず

あすか川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ

寛平の御時后の宮の歌合の歌

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物には有るらむ

題しらず

さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治の橋姫

又は宇治のたまひめ

君やこむわれや行かむのいさよひに槇の板戸もささずねにけり　素性法師

今こむといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな　讀人しらず

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず

君こずばねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも

宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそまて

あな戀しいまも見てしが山賤の垣ほに咲けるやまとなでしこ
津の國のなには思はず山城のとはにあひみむことをのみこそ　貫之
敷嶋のやまとにはあらぬ唐衣ころもへずして逢ふよしもがな　深養父
戀しとはたが名づけけむことならむ死ぬとぞ唯にいふべかりける　讀人しらず
みよしのの大川のべの藤波のなみにおもはばわがこひめやは
かく戀ひむ物とはわれも思ひにき心のうらぞまさしかりける
天の原ふみとどろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは
梓弓ひき野のつづらすゑつひに我が思ふ人にことのしげけむ

此歌は或人あめのみかどあふみのうねめにたまひけるとな

む申す

夏引の手びきの糸をくり返しことしげくとも絶えむと思ふな

此歌はかへしによみて奉りけるとなむ

里人のことは夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやは

藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女を
あひ知りて文遣せりける言葉に今まうでく雨の
降りけるをなむみわづらひ侍るといへりけるを
聞きてかの女にかはりてよめりける　在原業平朝臣
數々に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる
ある女の業平の朝臣をところ定めずありきすと
思ひてよみてつかはしける　讀人しらず
大幣の引く手あまたに成りぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

かへし　　業平朝臣

大幣と名にこそたてれ流れても終によるせはありてふものを

題しらず　　讀人しらず

須磨のあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心の嬉しげもなし

誰が里によがれをしてか時鳥ただここにしもねたるこゑする

いで人はことのみぞよき月草のうつしごころは色ことにして

僞のなき世なりせばいかばかり人のことの葉うれしからまし

いつはりと思ふ物からいまさらにたが誠をかわれはたのまむ

あき風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかがとぞおもふ　　素性法師

寛平の御時后の宮の歌合の歌　　友則

蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむとおもへば

題しらず　　讀人しらず

空蟬の世の人ごとのしげければ忘れぬもののかれぬべらなり

あかでこそ思はむなかは離れなめそをだに後の忘れがたみに

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ悲しき戀

わすれなむわれをうらむな時鳥人のあきにはあはむともせず

絶えずゆくあすかの川のよどみなば心ありとや人のおもはむ

此歌ある人のいはくなかとみのあづま人が歌なり

淀川のよどむと人は見るらめどながれてふかき心あるものを　　素性法師

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波はたて　　讀人しらず

くれなゐの初花ぞめのいろふかくおもひし心われわすれめや　河原左大臣

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れむと思ふわれならなくに　讀人しらず

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

ちぢの色にうつろふらめど知らなくに心し秋の紅葉ならねば　小野小町

蜑の住む里のしるべにあらなくに恨みむとのみ人のいふらむ　しもつけのをむね

曇日の影としなれるわれなれば目にこそ見えね身をば離れず　貫之

色もなき心を人に染めしよりうつろはむとはおもほえなくに

珍らしき人を見むとやしかもせぬわが下紐のとけわたるらむ　讀人しらず

陽炎のそれかあらねか春雨のふるひとなればそでぞぬれぬる

堀江こぐたななし小船こぎ歸りおなじ人にやこひわたりなむ　伊勢

わたつ海とあれにし床を今更にはらはば袖やあわとうきなむ　貫之

いにしへに猶たちかへる心かな戀しきことにものわすれせで

人をしのびにあひしりて逢ひがたくありければ

其家のあたりをまかりありきけるをりに雁のなくを聞きてよみてつかはしける　大伴黒主

思ひ出でて戀しきときは初雁のなきてわたると人しるらめや

右のおほいまうち君すまずなりにければかの昔おこせたりける文どもを取りあつめて返すとてよみて送りける　典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし言の葉今はかへしてむ我が身ふるればおき所なし　近院右大臣

今はとて返す言の葉ひろひ置きておのが物から形見とやみむ　よるかの朝臣

題しらず

玉ほこの道は常にもまどはなむ人をとふともわれかと思はむ　讀人しらず

待てといはばねてもゆかなむしひて行く駒の足をれ前の棚橋　中納言源の昇の朝臣の近江の介に侍りける時によみてやれりける　閑院

逢坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見め　伊勢

題しらず

故郷にあらぬものからわがためにひとの心のあれてみゆらむ　寵

山がつの垣ほにはへる青つづら人はくれどもことつてもなし　さかるのひとざね

大空はこひしき人の形見かはもの思ふごとにながめらるらむ　讀人しらず

逢ふまでの形見も我はなにせむに見ても心のなぐさまなくに

親の守りける人のむすめにいと忍びにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひければ急ぎかへるとて裳をなむぬぎ置きて入りにけるそ

ののち裳を返すとてよめる　　興風

逢ふまでの形見とてこそとどめけめ涙に浮ぶもくづなりけり

題しらず　　讀人しらず

形見こそ今はあたなれこれなくば忘るる時もあらましものを

古今和歌集　卷十五

戀歌五

五條のきさいの宮の西の對に住みける人にほいにはあらでもものいひ渡りけるを睦月の十日あまりになむ外へ隱れにけるあり所は聞きけれどえ物もいはで又の年の春梅の花ざかりに月の面白かりける夜去年をこひてかの西の對にいきて月の傾くまであばらなる板敷にふせりてよめる　　在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

題しらず　　藤原仲平朝臣

花薄われこそしたに思ひしかほに出てひとにむすばれにけり　藤原兼輔朝臣

よそにのみ聞かまし物を音羽川渡るとなしにみなれそめけむ　凡河内躬恒

わがごとくわれを思はむ人もがなさてもやうきと世を試みむ　元方

久方のあまつ空にもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる　讀人しらず

見てもまた又も見まくのほしければなるるを人は厭ふべらなり　紀友則

雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ　讀人しらず

花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらむ數ならぬ身は　伊勢

うきめのみ生ひて流るる浦なればかりにのみこそ蜑はよるらめ　讀人しらず

逢ひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるるがほなる　讀人しらず

秋ならでおく白つゆはねざめする我がたまくらの雫なりけり

須磨の蜑の鹽焼衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

山城の淀のわかごもかりにだにこぬ人たのむわれぞはかなき

逢ひみねば戀こそまされ水無瀬川なにに深めて思ひそめけむ

曉のしぎのはねがきもも羽がぎ君がこぬ夜はわれぞかずかく

たまかづら今はたゆとや吹く風のおとにも人の聞えざるらむ

わが袖にまだきしぐれのふりぬるは君が心にあきやきぬらむ

山の井のあさき心もおもはぬにかげばかりのみ人の見ゆらむ　兼藝法師

忘れ草たねとらましを逢ふ事のいとかく難きものとしりせば

こふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへやおひ茂るらむ　貞登

夢にだにあふことかたくなり行くは我やいをねぬ人や忘るる

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬなかぞ遙けかりける

獨のみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞ生ひける　僧正遍昭

我が宿は道もなき迄あれにけりつれなき人を待つとせしまに

今こむといひて別れし朝よりおもひくらしのねをのみぞなく　讀人しらず

こめやとは思ふ物からひぐらしのなく夕暮はたち待たれつつ

今しはとわびにし物をささがにの衣にかかりわれをたのむる

今はこじと思ふ物から忘れつつ待たるる事のまだもやまぬか

月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなむ佗びつつもねむ

植ゑていにし秋田刈る迄見えこねばけさ初雁のねにぞ鳴きぬる

こぬ人をまつ夕ぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ

久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しき物にぞありける　兼覽王

住の江のまつ程久に成りぬれば蘆たづのねになかぬ日はなし

仲平の朝臣あひしりて侍りけるをかれがたに成

りにければ父が大和の守に侍りけるもとへまか

るとてよみて遣しける　伊勢

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば　雲林院のみこ

題しらず

吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこころの　小野小町

今はとて我が身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり　小野さだき

かへし

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りもみだれめ

業平の朝臣紀の有常がむすめにすみけるを恨む

ることありてしばしのあひだひるはきて夕さりは歸りのみしければよみて遣しける

天雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆる物から　業平朝臣

かへし

ゆきかへり空にのみしてふることは我がゐる山の風早みなり　かげのりの王

題しらず

唐衣なれば身にこそ纏(まつは)れめかけてのみやは戀ひむとおもひし　友則

秋風は身をわけてしも吹かなくにひとの心のそらになるらむ　源宗于朝臣

つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける

心地そこなへりける頃あひしりて侍りける人の

とはで心地おこたりて後とぶらへりけ(れ)ばよみて遣しける　兵衛

しでの山麓を見てぞかへりにしつらき人よりまづこえじとて

あひしれりけろ人のやうやくかれがたになりけ

るあひだにやけたるちの葉に文をさしてつかはせりける　小町が姉

時すぎて枯れゆく小野の淺茅には今はおもひぞ絶えずもえける

物思ひける頃物へまかりける道に野火のもえけるを見てよめる　伊勢

冬枯の野邊と我が身を思ひせばもえても春をまたましものを

題しらず　友則

水の沫のきえでうき身といひながら流れて猶も頼まるるかな　讀人しらず

水無瀬川ありて行く水なくばこそ終に我がみをたえぬと思はめ　躬恒

よしの川よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れじ

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすきいろにぞありける　讀人しらず

心こそうたてにくけれ染めざらばうつろふ事も惜からましや　小町

色みえでうつろふものは世の中のひとの心の花にぞありける　讀人しらず

われのみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花とちりなば　素性法師

思ふともかれなむ人を如何せむあかず散りぬる花とこそ見め　讀人しらず

今はとて君がかれなば我が宿の花をばひとり見てやしのばむ　宗于朝臣

忘れ草かれもやするとつれもなき人のこころに霜は置かなむ

寛平の御時御屏風に歌かかせ給ひける時よみてかきける　素性法師

わすれぐさなにをかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり

題しらず

秋の田のいねてふ事もかけなくに何をうしとか人のかるらむ　紀貫之

初雁の鳴きこそわたれ世の中の人のこころのあきしうければ

讀人しらず

あはれとも憂しともものを思ふ時などか涙のいとなかるらむ

身を憂しと思ふに消えぬ物なればかくても經ぬる世にこそ有りけれ

典侍藤原直子朝臣

蜑のかる藻に住む蟲の我からとねをこそなかめ世をば恨みじ

あひみぬもうきも我が身の唐衣思ひしらずも解くるひもかな

いなば

寛平の御時后の宮の歌合の歌

つれなきを今は戀ひじと思へどもこころよわくもおつる涙か

菅野忠臣

題しらず

人知れず絶えなましかば佗びつつもなき名ぞとだにいはまし物を

伊勢

讀人しらず

それをだに思ふ事とて我が宿をみきとないひそ人のきかくに

逢ふ事のもはらたえぬる時にこそ人の戀しきこともしりけれ

佗びはつるときさへ物の悲しきはいづこをしのぶ涙なるらむ

うらみても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして

藤原興風

夕されば人なき床をうちはらひ歎かむためとなれる我が身か　讀人しらず

わたつみの我が身こす波立ち返り蜑の住むてふ浦みつるかな

あら小田をあらすきかへし返しても人の心を見てこそやまめ

ありそ海の濱の眞砂と頼めしは忘るることの數にぞ有りける

蘆べより雲井をさしてゆく雁のいやとほざかる我が身悲しも

しぐれつつもみづるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき

あき風の吹きとふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり　小町

秋風にあふたのみこそ悲しけれ我が身空しくなりぬと思へば

秋風の吹きうらがへす葛の葉のうらみても猶うらめしきかな　平貞文

秋といへば外にぞ聞きしあだ人の我を古せる名にこそ有りけれ　讀人しらず

忘らるる身をうぢ橋の中たえて人もかよはぬとしぞへにける

又はこなたかなたに人も通はず　坂上是則

逢ふ事を長柄の橋のながらへて戀ひわたるまに年ぞへにける　友則

うきながらけぬる沫ともなりななむ流れてとだに頼まれぬ身は

流れてはいもせの山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中　讀人しらず

古今和歌集　巻第十六

哀傷歌

妹の身まかりける時よみける　小野篁朝臣

泣くなみだ雨とふらなむ渡り川水まさりなばかへりくるがに

さきのおほきおほいまうち君を白河のあたりに　素性法

おくりける夜よめる

血の涙落ちてぞたぎつ白河は君が世までの名にこそありけれ

堀河のおほきおほいまうち君身まかりにける時　僧都勝延

に深草の山にをさめて後に詠みける

うつせみはからを見つつもなぐさめつ深草のやま煙だにたて

深草の野邊のさくらし心あらばことしばかりは墨ぞめにさけ　かんつけの岑雄

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家に遣しける　紀友則

寝ても見ゆねでも見えけり（てイ）大方は空蟬の世ぞ夢には有りける

あひ知れりける人の身まかりにければよめる　紀貫之

夢とこそいふべかりけれ世の中に現あるものと思ひけるかな

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる　壬生忠岑

ぬるが内（うち）に見るをのみやは夢と言はむはかなき世をも現とはみず

姉のみまかりにける時によめる

瀬をせけば淵と成りてもよどみけりわかれをとむる柵（しがらみ）ぞなき

藤原のただふさが昔あひ知りて侍りける人の身

まかりにける時にとぶらひに遣すとてよめる　閑院

さきだたぬくいの八千度悲しきは流るる水のかへりこぬなり

紀友則が身まかりにける時よめる　貫之

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを　忠岑

母がおもひにてよめる　凡河内躬恒

神無月しぐれにぬるるもみぢ葉はただわびびとの袂なりけり

父がおもひにてよめる　忠岑

ふぢごろもはつるる糸はわびびとの涙の玉の緒とぞなりける

おもひに侍りける年の秋山寺へまかりけるみち

にてよめる　貫之

朝露のおくての山田かりそめにうきよの中をおもひぬるかな　稲葉

おもひに侍りける人をとぶらひに罷りてよめる　忠岑

すみぞめの君がたもとは雲なれや絶えず涙のあめとのみふる

めの親のおもひにて山寺に侍りけるをある人の

とぶらひ遣せりければ返事によめる　讀人しらず

あしびきの山邊にいまはすみぞめの衣の袖のひるときもなし

諒闇の年池のほとりの花を見てよめる　篁朝臣

水の面にしづく花の色さやかにも君がみ影のおもほゆるかな

深草の帝の御國忌の日よめる　文屋康秀

草深き霞の谷にかげかくし照る日のくれし今日にやはあらぬ

深草の帝の御時に藏人の頭にてよるひるなれつ

かうまつりけるを諒闇に成りにければ更に世に

もまじらずして比叡の山に登りてかしらおろし
てけりその又の年みな人御ぶくぬぎてあるはか
うぶり給はりなどよろこびけるを聞きてよめる　僧正遍昭

みな人ははなの衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ

河原のおほいまうち君の身まかりての秋かの家
の邊をまかりけるに紅葉の色まだ深くもならざ
りけるを見てかの家によみていれたりける　近院右大臣

うちつけに寂しくも有るかもみぢ葉も主なき宿は色なかりけり

藤原のたかつねの朝臣の身まかりての又の年の
夏郭公のなきけるを聞きてよめる　貫之

郭公けさなく聲におどろけば君にわかれしときにぞありける

櫻を植ゑてありけるにやうやく花咲きぬべき時

にかの植ゑける人身まかりにければその花を見
てよめる　紀のもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれを先に戀ひむとか見し

あるじ身まかりにける人の家の梅の花をみてよ
める　貫之

色も香もむかしのこさに匂へどもうゑけむ人の影ぞこひしき

河原の左のおほいまうちぎみの身まかりて後か
の家にまかりてありけるに鹽釜といふ所のさま
をつくれりけるを見てよめる

君まさで煙たえにししほがまのうら寂しくも見えわたるかな

藤原の利基の朝臣の右近中將にてすみ侍りける
ざうしの身まかりて後人もすまずなりにけるに

秋の夜ふけて物よりまうできけるついでに見い
れければもとありし前栽いと茂く荒れたりける
を見て早くそこに侍りければ昔を思ひやりてよ
みける　　みはるのありすけ

君が植ゑし一むら薄蟲の音のしげき野邊ともなりにけるかな
惟喬のみこの父の侍りけむ時によめりけむうた
どもとこひければかきて送りける奥によみて書
けりける　　友則

ことならば言の葉さへも消えなむ見れば涙の瀧まさりけり
題しらず　　讀人しらず

なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ
誰みよと花さけるらむ白雲のたつ野とはやくなりにしものを

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりける
をいくばくもあらで女のみこの身まかりにける
時にかのみこの住みける帳のかたびらのひもに
ふみをゆひつけたりけるを取りてみれば昔の手
にてこの歌をなむ書きつけたりける
かずかずにわれを忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ
をとこの人の國にまかりけるまに女にはかに病
をしていとよわくなりける時よみ置きて身まか
りにける　　讀人しらず

聲をだに聞かで別るるたまよりもなき床にねむ君ぞかなしき
やまひにわづらひ侍りける秋ここちのたのもし
げなくおぼえければよみて人のもとにつかはし

ける　大江千里

もみぢ葉を風に任せて見るよりもはかなきものは命なりけり

みまかりなむとてよめる　藤原これもと

露をなどあだなる物と思ひけむ我が身も草におかぬばかりを

やまひして弱くなりにける時よめる　業平朝臣

終に行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

甲斐の國にあひ知りて侍りける人とぶらはむと

てまかりける道なかにてにはかに病をしていま

いまとなりにければよみて京にもてまかりて母

に見せよといひて人につけ侍りける歌　在原滋春

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今は限のかどでなりけり

古今和歌集　卷第十七

雜歌上

題しらず　讀人しらず

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいのしづくか

思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまく惜しき物にぞ有りける

うれしきをなににつつまむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを

かぎりなき君が爲にと折る花は時しもわかぬ物にぞありける

或人のいはく此歌はさきのおほいまうち君のなり

紫のひともとゆゑに武藏野のくさはみながらあはれとぞ見る

めのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬを

おくるとてよみてやりける　　業平朝臣

紫のいろこきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

大納言藤原のくにつねの朝臣宰相より中納言になりける時にそめぬうへのきぬのあやをおくるとてよめる　　近院右大臣

色なしと人や見るらむかしよりふかき心にそめてしものを

石の上のなんまつが宮仕もせでいその上といふ

所にこもり侍りけるを俄にかうぶりたまはれりければ悦いひつかはすとてよみて遣しける　　布留今道

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里に花も咲きけり

二條の后のまだ東宮の御息所と申しける時に大原野に詣うで給ひける日よめる　　業平朝臣

おほはらや小鹽の山も今日こそは神代のことも思ひ出づらめ　　良岑宗貞

五節の舞姫を見てよめる

あまつ風雲のかよひぢ吹きとぢよをとめの姿しばしとどめむ

五節のあしたにかむざしの玉の落ちたりけるを見て誰がならむととぶらひて詠める　　河原左大臣

ぬしや誰とへどしら玉いはなくにさらばなべてや哀と思はむ

寛平の御時にうへのさぶらひに侍りけるをのこども瓶を持たせて后の宮の御方におほみきのおろしときこえに奉りたりけるを藏人ども笑ひて瓶を御前にもて出でてともかくもいはずなりにければ使の歸りきてさなむありつるといひければ藏人のなかに送りける　　壬生忠岑

玉垂のをがめやいづらこよろぎの磯の波わけ沖に出でにけり
女どもの見て笑ひければよめる　けんけい法師

かたちこそみやまがくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ
方たがへに人の家にまかれりける時にあるじの
きぬを著せたりけるをあしたにかへすとてよみ
ける　紀友則

蟬の羽のよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな
題しらず　讀人しらず

遲く出づる月にもあるかな足引の山のあなたも惜むべらなり

我が心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て
業平朝臣

大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

月おもしろしとて凡河内躬恒がまうできたりけ
るによよめる　紀貫之

かつ見れど疎くも有るかな月影の到らぬ里もあらじと思へば

池に月の見えけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなぞこに山の端ならで出づる月影
題しらず　讀人しらず

あまのがは雲のみをにてはやければ光とどめず月ぞながるる

あかずして月の隱るる山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

惟喬のみこの狩しける供にまかりてやどりに歸
りて夜ひとよ酒をのみ物語をしけるに十一日の
月も隱れなむとしける折にみこ醉ひて内へ入り
なむとしければよみ侍りける　業平朝臣

あかなくにまだきも月の隱るるか山の端にげて入れずもあらなむ

田村の帝の御時に齋院に侍りけるあきらけいこのみこを母あやまちありといひて齋院をかへられむとしけるを其事やみにければよめる　あま敬信

おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせども光けなくに

題しらず　讀人しらず

石の上ふるから小野のもとがしはもとの心はわすられなくにいにしへの野中のしみづぬる.けれどもとの心をしる人ぞくむ

古のしづのをだまき賤しきもよきもさかりはありしものなり今こそあれわれもむかしは男山さかゆく時もありこしものを

世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり

笹の葉に降りつむ雪のうれを重みもとくだちゆく我が盛はも

おほあらきの森の下草おいぬれば駒もずさめずかる人もなし

又はさくらあさのをふの下草おいぬれば

數ふればとまらぬ物をとしといひて今年は痛く老いぞしにける

おしてるや難波のみつに燒く鹽のからくも我は老いにけるかな

又はおほともものみつの濱邊に

老いらくのこむと知りせば門さしてなしと答へて逢はざらましを

此三つの歌は昔ありけるみたりの翁のよめるとなむ

さかさまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齡や共に歸ると

とりとむる物にしあらねば年月を哀あなうとすぐしつるかな

留めあへず宜もとしとは言はれけり然もつれなくすぐる齡かな

鏡山いざたちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

此歌はある人のいはく大伴黑主がなり

業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りけるに業平(ときィ)
みやづかへすとて時々もえまかりとぶらはず侍
りければしはすばかりに母のみこのもとよりと
みの事とて文をもてまうできたりあけて見れば
ことばはなくて有りける歌
老いぬればさらぬ別のありといへば彌々(いよいよ)見まくほしき君かな
かへし　業平朝臣
世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため
寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな
白雪のやへふりしけるかへる山かへるがへるも老いにけるかな
同じ御時うへのさぶらひにてをのこどもにおほ
みき給ひておほみあそびありけるついでにつか
うまつれる　敏行朝臣
老いぬとてなどか我が身をせめきけむ老いずは今日にあはまし物か
題しらず　讀人しらず
千早振うぢの橋守なれをしぞあはれとはおもふ年のへぬれば
我が見てもひさしくなりぬ住吉(すみのえ)のきしの姫松いく世經ぬらむ
すみよしの岸の姫松ひとならば幾代か經しと問はましものを
あづさゆみ磯邊の小松たがよにか萬代かけてたねをまきけむ
この歌はある人のいはく柿本人麿がなり
かくしつつ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに
藤原興風
たれをかも知る人にせむたかさごのまつも昔の友ならなくに
讀人しらず

わたつ海の沖つ鹽あひに浮ぶ沫の消えぬ物からよる方もなし
わたつみのかざしにさせる白妙のなみもてゆへるあはぢ島山
わたの原よせくる波のしばしばも見まくのほしき玉津島かも
なにはがた汐みちくらしあま衣たみのの島にたづなきわたる
　　貫之が和泉の國に侍りける時にやまとよりこえ
まうできてよみて遣しける　　藤原忠房
君を思ひ沖つの濱に鳴くたづの尋ねくればぞありとだに聞く
　　貫之
かへし
沖つ波たかしの濱のはままつの名にこそ君をまちわたりつれ
なにはにまかれりける時によめる
難波潟おふる玉藻をかりそめの蜑とぞわれはなりぬべらなる
あひ知れりける人の住吉にまうでけるによみて

つかはしける　　壬生忠岑
すみよしと蜑はつぐともながゐすな人忘れ草おふといふなり
難波へまかりけるとき田蓑の島にて雨にあひて
よめる　　貫之
雨により田蓑の島を今日ゆけばなには隱れぬ物にぞ有りける
法皇西川におはしましたりける日鶴洲にたてり
といふことを題にてよませ給ひける
あしたづのたてる川邊を吹く風によせて歸らぬ波かとぞ見る
中務のみこの家の池に船をつくりておろしはじ
めてあそびける日法皇御覽じにおはしましたり
けり夕さりつかた歸りおはしまさむとしける折
によみて奉りける　　伊勢

水の上に浮べる船の君ならばここぞとまりといはましものを
　からことといふ所にてよめる　　眞せい法師

都までひびきかよへるからことは波の緒すげて風ぞひきける
　布引の瀧にてよめる　　在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうきときの涙にぞかる
　布引の瀧のもとにて人々あつまりて歌よみける
　時によめる　　業平朝臣

ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに
　吉野の瀧を見てよめる　　承均法師

誰が爲にひきて洒せる布なれや世をへて見れどとる人のなき
　題しらず　　神たい法師

きよたきの瀬々の白糸くりためてやまわけ衣おりてきましを

龍門にまうでて瀧のもとにてよめる　　伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ
　朱雀院の帝布引の瀧御覽ぜむとてふん月の七日
　の日おはしましてありける時にさぶらふ人々に
　歌よませ給ひけるによめる　　橘長盛

主なくてさらせる布をたなばたにわが心とや今日はかさまし
　比叡の山なるおとはの瀧を見てよめる　　忠岑

落ちたぎつ瀧のみなかみ年積り老いにけらしな黒きすぢなし
　おなじ瀧をよめる　　躬恒

風ふけど所もさらぬ白雲は世をへておつるみづにぞありける
　田村の御時に女房のさぶらひにて御屏風の繪御
　覽じけるに瀧落ちたりける所面白し是を題にて

歌よめとさぶらふ人に仰せられければよめる　三條の町

おもひせく心のうちの瀧なれやおつとは見れど音のきこえぬ

屏風の繪なる花をよめる　貫之

咲きそめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風の繪によみ合せてかきける　坂上是則

刈りてほす山田の稲のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

古今和歌集　卷第十八

雜歌下

題しらず　讀人しらず

世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬になる

幾世しもあらじ我が身をなぞもかく蜑の刈藻に思ひみだるる

雁のくるみねの朝霧はれずのみおもひつきせぬ世の中のうさ　小野篁朝臣

然りとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中

甲斐の守にて侍りける時京へまかりのぼりける人につかはしける　小野貞樹

みやこびといかにと問はば山高みはれぬ雲井にわぶと答へよ
　文屋の康秀が三河のぞうに成りてあがた見には
　え出でたたじやと云ひやれりける返事によめる　小野小町
佗びぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ
　題しらず
あはれてふ事こそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ　讀人しらず
あはれてふ言の葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり
世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり
世の中は夢か現かうつつともゆめとも知らずありてなければ
世の中にいづら我が身のありてなし哀とやいはむあなうとやいはむ
山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり

白雲の絶えずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそありけれ　惟喬のみこ
知りにけむ聞きても厭へ世の中は波のさわぎに風ぞしくめる　布留今道
いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ　素性
世の中は昔よりやは憂かりけむわが身一つのためになれるか　讀人しらず
世の中をいとふ山邊の草木とやあなうの花の色に出でにけむ
み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ
世にふればうさこそまされみ吉野の岩の陰路ふみならしてむ
いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞えこざらむ

足引の山のまにまにかくれなむうき世の中はあるかひもなし
世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし

おなじ文字なき歌　　もののべのよしな

世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ
山の法師のもとへつかはしける　　凡河内躬恒

世をすてて山にいる人やまにても猶うき時はいづち行くらむ
物おもひける時いときなき子を見てよめる

今更になに生ひいづらむ竹の子のうきふし繁きよとはしらずや

題しらず　　讀人しらず

よにふればことの葉しげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞなく
木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべらなり

ある人のいはくたかつの皇子の歌なり

わが身からうき世の中と歎きつつ人のためさへ悲しかるらむ
隱岐の國に流されて侍りける時によめる　　篁朝臣

思ひきやひなの別におとろへて蜑のなはたぎいさりせむとは
田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ
所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に
遣しける　　在原行平朝臣

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつつわぶと答へよ
左近將監とけて侍りける時に女のとぶらひにお
こせたりける返事によみて遣しける　　小野春風

あまびこの訪れじとぞ今は思ふわれか人かと身をたどる世に
つかさとけて侍りける時よめる　　平貞文

憂世には門させりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする

ありはてぬ命待つまの程ばかりうきことしげく歎かい思はずもかな
　みこの宮の帶刀に侍りけるを宮づかへつかうまつらずとて解けて侍りける時によめる　みやぢのきよき

筑波嶺のこのもと毎に立ちぞよる春のみ山のかげを戀ひつつ
　時なりける人の俄に時なくなりて歎くを見てみづからのなげきもなくよろこびもなきことを思ひてよめる　清原深養父

光なき谷には春も外なれば咲きてとくちるものおもひもなし
　桂に侍りける時に七條中宮とはせ給へりける御かへり事に奉りける　伊勢

ひさかたのなかにおひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる
　紀の利貞が阿波の介にまかりける時むまのはなむけせむとて今日といひおくれりける時にここかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければ遣しける　業平朝臣

今ぞ知る苦しきものと人またむ里をばかれず問ふべかりけり
　惟喬のみこの許にまかり通ひけるをかしらおろして小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるに比叡の山の麓なりければ雪いと深かりけりしひて彼のむろにまかりいたりてをがみけるに徒然としていと物悲しくて歸りまうできてよみて送りける

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは
　深草の里にすみ侍りて京へまうでくとてそこな

りける人によみておくりける

年をへて住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ

かへし　讀人しらず

野とならば鶉と鳴きて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

題しらず

我を君難波の浦に有りしかば憂きめをみつのあまと成りにき

この歌はある人むかし男ありけるをうなの男とはずなりにければ難波のみつの寺にまかりて尼になりてよみて男に遣せりけるとなむいへる

かへし

難波潟うらむべきまも思ほえず何處をみつのあまとかはなる

今さらにとふべき人もおもほえず八重葎してかどさせりてへ

友だちの久しうまうでこざりけるもとによみて遣しける　躬恒

水の面におふるさ月の浮草のうきことあれや根を絶えてこぬ

人をとはで久しうありけるをりにあひうらみければよめる

身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

むねをかのおほよりが越よりまうできたりける

ときに雪の降りけるを見ておのがおもひはこの雪のごとくなむ積れるといひける折によめる

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば

かへし　宗岳大頼

君をのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆるときある